みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

航海術と海の空間認識 ：中央カロリン諸島・Satawal島における事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Central Caroline Islands ｜ Satawal ｜ navigational knowledge ｜ space cognition ｜ image/reality 作成者: 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004212

航海術と海の空間認識
——中央カロリン諸島・Satawal 島における事例——

秋　道　智　彌*

Cognition at Seas:
Navigational Knowledge in Satawal, Central Caroline Islands, Micronesia

Tomoya Akimichi

This paper describes several sets of traditional navigational knowledge employed by navigators in the Central Caroline Islands of Micronesia. It includes Senóng, Yarhuwów, Rhéaniy, Tunui Néén Anufa, Serhakinimasaccha, Ripweripwen Anan Aniairhé, Féfén Perhan Yayufan, and Fée Yiyas. Each set of knowledge contains hypothetical voyages between islands and reefs scattered in Micronesian waters. It also refers to encounters with fish, whale, sea birds, and driftwoods which are inferred as being esoteric and unrealistic in shape. Similarly, the knowledge includes evoked images in which a fisherman or navigator pursues reef fish which escape from one hole to another. Furthermore, navigational routes taken in imaginary voyages often create images of dorsalfin, stone weir, or a whole fish shape. Contrary to earlier assumptions that these items of knowledge are useful only esoterically and for group identity used by navigators of different schools and experiences, these items also serve navigators to spontaneously create images and maps for space allocation during voyages. The seemingly esoteric knowledge then bears the practical significance for location finding and in making marine charts.

* 国立民族学博物館第1研究部

Key Words : Central Caroline Islands, Satawal, navigational knowledge, space cognition, image/reality
キーワード：中央カロリン諸島，サタワル，航海術の知識，空間認識，イメージ／実在

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．結果——知識項目の記述
1. Senóng
2. Yarhuwów
3. Rhéaniy
4. Tunui Néén Anufa
5. Serhakinimasaccha
6. Ripweripwen Anan Aniairhé
7. Féfén Perhan Ayufan
8. Fée Yiyas
Ⅲ．考察——同定と比較
1. 知識項目の重複
2. 地図的展開
3. Riesenberg の資料との比較
Ⅳ．結論と討論

Ⅰ．はじめに

本論では，Satawal 島における筆者の野外調査資料をもとに，ミクロネシアのカロリン諸島における航海術の知識について記述と分析をおこなう。とりあげるのは，以下の8つの知識項目である。すなわち，Senóng, Yarhuwów, Rhéaniy, Tunui Néén Anufa, Serhakinimasaccha, Ripweripwen Anan Aniairhé, Féfén Perhan Ayufan, Fée Yiyas である。そして，これらの知識がじっさいの航海のさいに海上でいかなる意味をもつのか，さらに航海術の知識全体のなかでどのように位置づけられるのかについて議論をしてみたい。

すでに私は Satawal 島における調査から，カロリン諸島一帯でおこなわれてきた航海術の知識体系のなかで，人びとが学習して体得し，あるいは実際に利用するための指針となるさまざまな知識項目について発表してきた [秋道　1980, 1981a, 1981b, 1984, 1988; Akimichi　1987, n.d.]。

これらを通覧すると，航海術の知識項目自体は，学習上の難易度や実際の航海における意味や応用度などの点で内容的にたいへんバラついている。

たとえば航海術のなかで，もっとも原理的に重要なものは羅針盤である。カロリン諸島では，15の星や星座の出没方位をもとにしてつくられたいわゆる星座コンパスがある（図1）。

この星座コンパスをもとにした基本的かつ重要な知識項目としては，Paafúú, Yárhowumw, Yamas がある。Paafúú は，星座コンパス上にある32の方位名称を記憶することをさす。Yárhowumw は，星座コンパス上で相対する方位の対を記憶することをさし，対の数は全部で16組ある。Yamas は星座コンパスの中央部にカヌーを想定し，そのカヌーの船首，船尾，アウトリガー側，プラットフォーム側の延長線上に

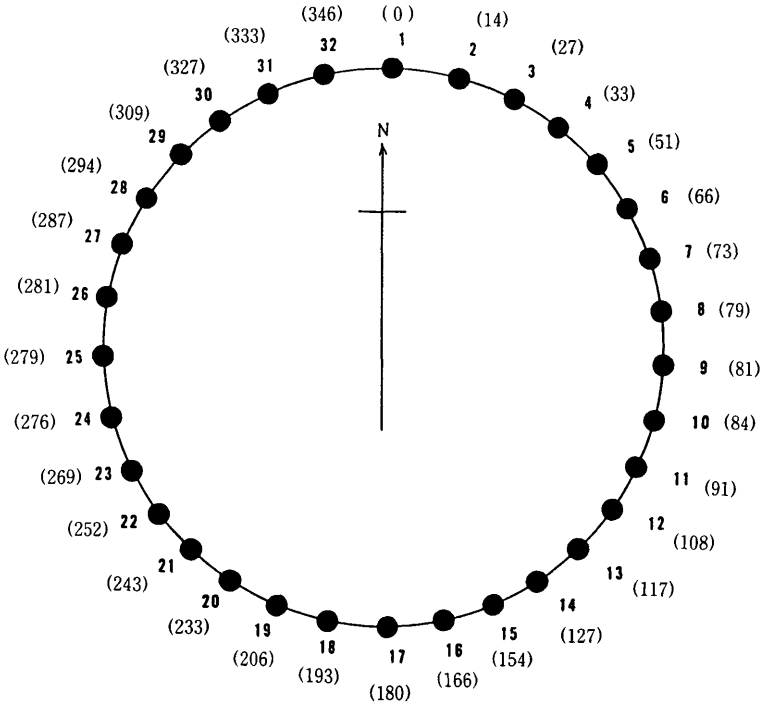


図1　星座コンパスと方位番号（1–32）
（　）内の数字は，コンパス方位（°）をあらわす

それぞれあたる4つの方位を1つの組として記憶するもので，カヌーの前後関係と左右での非対称性を考慮すると，その組合せは全部で32組ある [秋道　1981a]。

以上の3つは，あらゆる場合に適用される原理的な知識である。さらに海上という具体的な場で基本的に大切な知識が Woofanuw である。これは，ある島からみて周囲にある別の島じまやサンゴ礁が位置する方位を星座コンパスの32ある方位名称をもとに島ごとに網羅的に記憶する知識である。こうした知識はじっさいの航海上，なくてはならないものであることはいうまでもない [秋道　1984]。

これにたいして，みかけ上，実用性にとぼしいか，その可能性が低いと考えられる知識項目もなかにふくまれている。たとえば Pwukof は，ある島からみて周囲にあらわれる海鳥，魚，流木などの生物現象や泡，波といった海洋現象を網羅した知識である。場合によっては，サンゴ礁が言及されることもある [秋道　1988]。

Pwuupwunapanap は，水面に巨大なモンガラカワハギという魚が横たわっているというイメージをもちいて，その魚の頭，背びれ，腹びれ，尾などの部分に特定の島

やサンゴ礁，あるいは生物現象が対応するという内容の知識である [秋道　1981b; AKIMICHI　1987]。

これらには，実在の事物以外に架空とおもわれる存在が数おおくふくまれている。場合によっては，体が二又にわかれたクジラとか木の葉にのった超自然的な存在といったように，奇抜な内容のものもある。

こうしたことから，いくつかの項目は実用性がなく，単に知識として記憶するための「ジレッタント」的性格をもつものであり，航海術のさまざまな流派のあいだで秘儀的知識として保持されるか，あるいは単にその内容を記憶して「よりしっているほうが優れている」ことを競うための手立て，あるいは知的な遊びにすぎないとみなされてきた [GLADWIN　1970; RIESENBERG　1976]。

すなわち，カロリン諸島の航海術の知識は，実用的なものと，秘儀的で非実用的なものに二分することができるようにおもわれてきた。そして，実在と架空，実用と遊びといった二元的な区分や解釈だけで，ミクロネシアの航海術の知識を理解することができるとされてきたのである。

しかし，私は架空の存在を前提とした知識のありかたが，単に記憶力を競い合い，集団内での秘密主義のためだけに存在するとはどうしてもおもわれないのである。すでに Pwuupwunapanap と Pwukof にかんする知識の分析においても，実在物と架空の存在が共存することを自明のこととする，ないし不確実なものをとりこんで世界を理解するという認識のしかたが当然ありうるのではないか，ということを指摘した [秋道　1981b, 1988]。

とくに海という場について考えてみると，以上のことがたいへん説得力をもつのではないかとおもわれる。つまり海洋環境下では，場所を同定し区別するうえでの境界が曖昧である。島影がみえないときに，位置をしるうえでの目安となる魚や鳥といった指標物も一定の場所にとどまることはなくうごく存在である。

こうした環境下では，航海者が移動しながら位置や方位を確認し，しかも不慮の事故，あるいは竜巻や嵐といった天変地異の現象に遭遇しながら航海をつづけていくさいに，独自の認識手段と意志決定の方法が生み出されてきたのではないか。

海という場において，位置や方位，あるいは時間を認識するさいに，われわれ自身がしらない，あるいはまったく異なった見方や方法があるのではないか。ぎゃくにわれわれは，あまりにも既成の基準なり考えに執着しすぎてはいないだろうか。本論でとりあげる航海術の知識の分析が，海上における位置や方位を確認，ないし認識するうえでの認識地図（cognitive map）のようなものをしる有力な手立てになるのではな

いか [FRAKE　1985; GELL　1985; BLADES and SPENCER　1986]。

本論では，Satawal 島における航海者のうち男性5名を通じてえた情報をもとに，航海術の知識項目を記述し，既発表の資料とあわせて吟味，分析する。それらは，いずれも秘儀的な内容，あるいは架空の可能性をもつ要素をふくんでいる。そしてそれらにたいして，上記にのべたことがさらによくあてはまるのか，あるいはぎゃくに，やはり「ジレッタンティズム」のための知識でしかなかったのか，といった問題を議論してみたい。これが本論のおおきなねらいである。

なお本文中，Ep, Mg, Rp, Ik, Ew という記号によりそれぞれの情報提供者をあらわすことにする。Satawal 語の記載事項と表記方法については，調査当時の1980年に調査助手をつとめていただいた Sabino Sauchomal 氏により検討をうけた。Satawal 語の表記については，筆者のこれまでの発表論文でもちいた要領にしたがうものとする [秋道　1980, 1981a, 1981b, 1981c, 1984]。

Ⅱ．結果——知識項目の記述

本論でとりあげる航海術の知識に関連したものとして，既発表の Pwuupwunapanap [秋道　1981b; AKIMICHI　1987], Pwukof [秋道　1988], Yeták [秋道　1985] がある。このうち Pwuupwunapanap と Pwukof は全体の内容にとって重要とおもわれるので，考察のなかでとりあげることにする。

ここでは，8つの知識項目について順番に記述する（順不同）。なお，星座コンパス上の方位は，図1にある方位番号（1から32）によってあらわすものとし，その番号を文中でもちいるものとする。

1. Senóng

Senóng は，ある島を出発して一定の方向に航海すると，かならずクジラに遭遇するという内容の知識である。Senóng は，もともと「ココヤシの葉柄（ようへい）をならべる」という意味をあらわす。se- は「つくる，固定する」，nóng は「カヌーの揚げおろしにもちいられるココヤシの葉柄」をそれぞれさすことばである。すなわち，カヌー小屋から大～中型のカヌーを海岸におろしたり海から浜に引き揚げるとき，カヌーの滑りをよくするためにココヤシの葉柄を枕木のように砂浜に一定間隔ごとにならべる（写真1）。

Senóng という知識では，ココヤシの葉柄が海のクジラとしてあらわされている。

写真1　カヌーの揚げおろし風景と nóng（ココヤシの葉柄）

クジラのことも nóng とよばれる。Satawal 島では，2人の航海者から情報をえた。

1–1.　Rp

まず，Pulusuk 島から真南に進路をとる。Satawal 語では，wenewenenup とよばれる方位である（星座コンパスの方位番号は17）。すると，頭を北にむけた1頭のおおきなクジラに出会う。そのクジラに出会ったら，その場所から tupwun máyinap（方位番号25），すなわちほぼ西にすすむ。すると，別のおおきなクジラがいて，やはり頭を真北にむけている。そこでさらにその場所から fúúsumwákút の方位（方位番号1），すなわち真北にすすむと，Pikelot 環礁に到着する。

こんどは，Pikelot 環礁からもときた航路を真南にゆくと，さきほどのクジラに出

会う。こんどは，その場所から方位番号25のほうにいくと，ちがうクジラに出会う。そのクジラも頭を真北にむけている。そしてそこから真北にすすむと，Satawal 島に到着する。

このようにしてつぎつぎと航海をすすめ，何頭ものクジラに出会い，いくつもの島じまに到着する。Satawal 島にひきつづいて登場する島じまは，Lamotrek 環礁，Olimarao 環礁，Ifaluk 環礁，Woleai 環礁，Eaurupik 環礁，Sorol 環礁，Ulithi 環礁，Ngulu 環礁，そして Palau 諸島である。西カロリン諸島にある Palau がこの航海の最終目的地となる。

結局，12頭のクジラが12の島じまの真南にいることになる。そしてどのクジラもおおきくて，真北をむいている。これらの航路は，Pulap 島の大航海者である Sakurh がおこなった航海のルートであるとされる。そこでこのルート上で出会うクジラは，nóngon wai Sakurh，すなわち「Sakurh の航海のクジラ」とよばれる。

1–2.　Mg

1–1. よりも事例がすくなく，Pulusuk 島から Eaurupik 環礁までのあいだに 7 つの島やサンゴ礁が言及されている。ここでは，その名称だけを列記しておこう。

Pulusuk 島—Worhaisaw（サンゴ礁）—Nómwoniyorh（海域）—Ifaluk 環礁—Woleai 環礁—Eaurupik 環礁。

以上の 2 例を模式的にあらわしたのが図 2 である。

2.　Yarhuwów

この知識は，Puluwat 環礁の 1 人の男性がおこなう突き漁をモチーフとしている。Yarhuwów は，「棒きれで穴を突く」という意味である。yarhu というのは「棒きれやヤスで突く」，wów（<wóów）は「サンゴ礁の岩穴」をそれぞれあらわす。

2–1.　Rp

Puluwat 環礁の 1 人の男性が，Puluwat 環礁にある Wowunikaarh という名前の岩穴にいる wurha というブダイの一種を棒きれで突こうとする。すると，この魚は身をかわして Pulusuk 島にある別の岩穴に逃げこむ。魚の逃げた方位は táánupw（方位番号16番）である。wurha というのは，ブダイの 1 種のオニハゲブダイ（*Scarus jonesi*）であり [Akimichi and Sauchomal 1982: 19]，ほおの部分が赤い色をしているという。ブダイは，ふつうサンゴ礁の岩かげにかくれる習性をもつ。

男はこの魚を追いかけて Pulusuk 島にゆく。そこで wurha という魚がひそむ

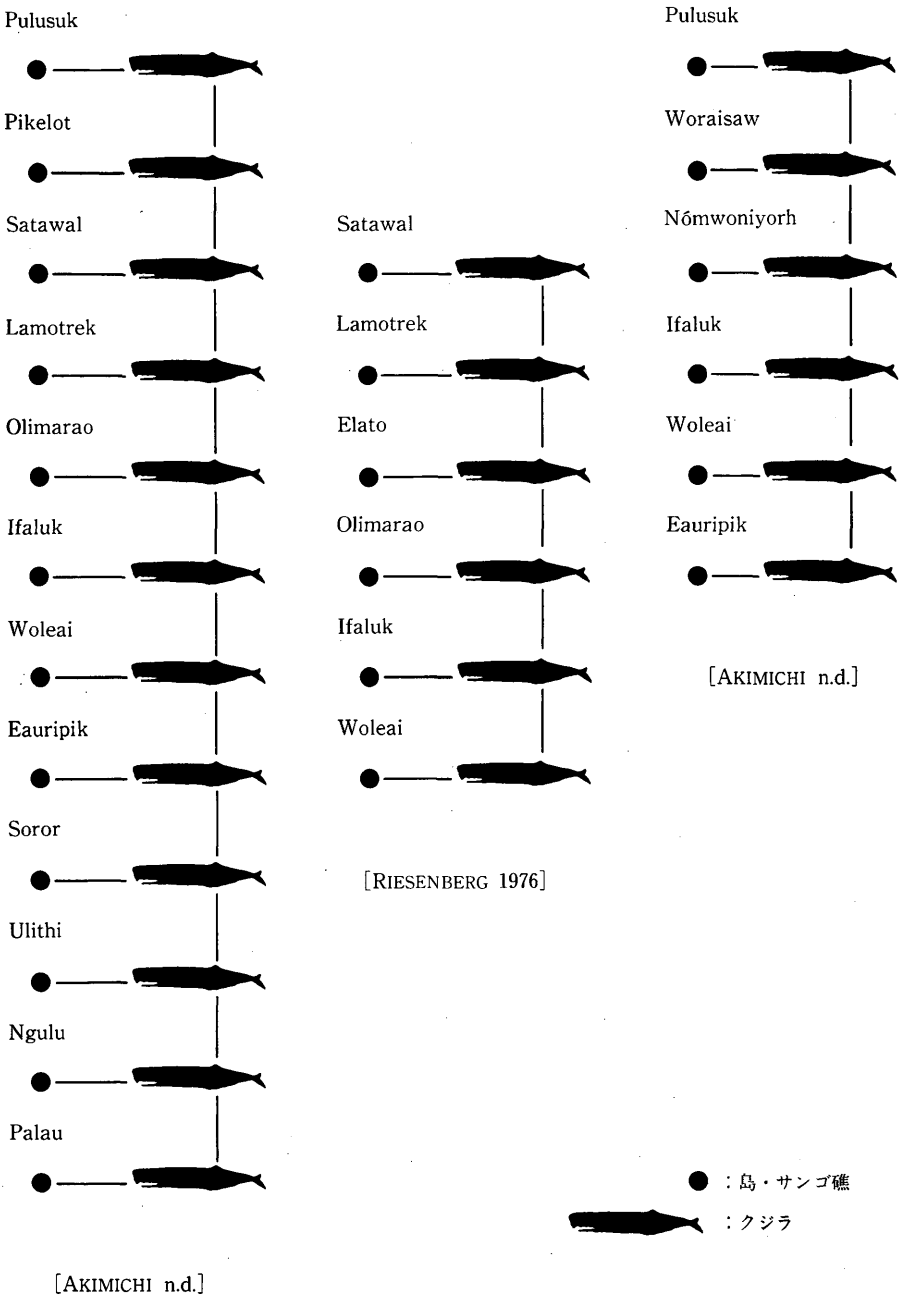


図 2　Senóng の知識の概要

Wówunikóópwurh という名前の岩穴をふたたび棒きれで突く。しかしこの場合も，魚は逃げてしまう。こんどは，ほぼ北の táán máyinápánefáng（方位番号 2）の方位に逃げてゆき，Tamatam 島に達する。

このようにして，魚が島から島へと逃げてゆき，男も島から島へと魚を追いかけてゆく。以下，魚がつぎつぎと逃げる方位番号と，逃げた先におけるサンゴ礁の岩穴の名称を列記しよう。なお括弧内は，岩穴の名称の意味内容をしめす。

Puluwat 環礁の Wówunikaarh（岩穴＋取り出そうとする）➡方位番号16

⬇

Pulusuk 島の Wówunikoopwurh（岩穴＋下にかくれる）➡方位番号 2

⬇

Tamatam 島の Wówumwaan（岩穴＋男性）➡方位番号 1

⬇

Pulap 島の Wówufefin（岩穴＋女性）➡方位番号 2

⬇

Ulul 島の Wówun manuurh（岩穴＋エビ）➡方位番号 3

⬇

Magur 島の Wówun wainé（岩穴＋漁法の 1 種）➡方位番号13

⬇

Ono 島の Wówun maiyas（岩穴＋有種子のパンノキ）➡方位番号13

⬇

Onari 島の Wów mwarhemwarh（岩穴＋花束）➡方位番号16

⬇

Pisaras 島の Wówiy niko（岩穴＋意味不明）➡方位番号 8

⬇

East Fayu 島の Wówiy nópwut（岩穴＋ウミヘビ）➡方位番号11

⬇

Nomwin 島の Wównarh（岩穴＋ウニ）➡方位番号11

⬇

Fananu 島の Wównap（岩穴＋おおきい）➡方位番号 6

⬇

Murilo 環礁の Wówunkkon（岩穴＋意味不明）➡方位番号20

⬇

Truk 環礁の Wówuniik（岩穴＋魚）➡方位番号 8

⬇

Oroluk 環礁の Wówunimwarh（岩穴＋意味不明）➡方位番号11

⬇

Ponphei 島の Wowui sówufonapei（岩穴＋ポナペ島の首長）➡方位番号11

⬇

Kosrae 島の Wowui sówukaraw（岩穴＋コシャエ島の首長）➡方位番号22

⬇

Ngatik 環礁の Wów pwerepwer（岩穴＋白い）➡方位番号25

⬇

Namoluk 環礁の Yépów（岩穴＋意味不明）➡方位番号25

⬇

Pulusuk 島の Wówiy nikópwurh（岩穴＋意味不明）➡方位番号32

⬇

Puluwat 環礁

最終的に，この魚は Pikelot 環礁の Wówiy nikópwur という名前の岩穴からふたたび Puluwat 環礁に逃げる。そこでついに，男はこの魚を突くことに成功する。これで，この知識はおわる。Yarhuwów という知識のなかで言及されているのは，中央および東カロリン諸島にあるほとんどの島じまであり，もっとも東端にあるのは Kosrae 島である。

3. Rhéaniy

Rhéaniy という知識は，前述の Yarhuwów と類似した内容をもっている。この場合も，島から島へ yaniy という魚を追いかけて漁をするという設定になっている。yaniy というのは，ハタの総称（Epinephelidae）である [Akimichi and Sauchomal 1982: 19]。rhé- は「下から捕まえる」という意味である。

3-1. Rp

この知識では，Pulusuk 島の男の漁師がハタを手で捕まえようとするところから話がはじまる。捕まえようとすると，この魚は Pwukuw mwormwoor という名前のサンゴ礁に逃げてゆく。そのサンゴ礁は Pulusuk 島から tupwun yúkúniik（方位番号30）

の方位，つまりほぼ北北西にある。

男は Pwukuw mwormwoor にゆき，そこで魚を手で捕まえようとする。しかし，魚はふたたび逃げてしまう。こんども，やはり魚は tupwun yúkúniik の方位に逃げてゆき，Pwukuw yenanai というサンゴ礁にかくれる。

このようにして，魚はつぎつぎとちがうサンゴ礁へ逃げてゆく。これらのサンゴ礁は，いずれも tupwun yúkúniik の方位にある。つまり，Pulusuk 島からおなじ方位にこれらのサンゴ礁がならんでいることになる。それらのサンゴ礁は，Pwukuw yasinnéi, Wurhourhan, Ruwat である。

Ruwat から，こんどは魚は Ruwatan fenarik というサンゴ礁へ逃げてゆく。その方位は táán yúkúniik（方位番号 4），すなわち北北東方向にかわる。Ruwatan fenarik からは，おなじ方位上にある Magur 島に逃げる。Magur 島からやはり táán yúkúniik の方位にゆくと，島やサンゴ礁ではなく，白い 1 羽のサギに出会う。そのサギには Sótaw という固有の名前がついている。

このようにして，サギのいる場所でハタを捕まえようとすると，やはりおなじ táán yúkúniik の方位上で 1 羽のサギがいる場所に魚が逃げてゆく。そのサギにも Rhataw という名前がついている。このサギは飛んでいる。

さらに魚がおなじ方位につぎつぎと逃げてゆくと，さまざまな生物が目安として登場する。それらを順番にあげると以下のようになる。

Yanniyón: 1 羽のグンカンドリ（yasaf）

Neainerhu: 1 羽のムクドリ（mwiy）

Rhesatikimwiy: 2 羽のムクドリ

Rhororhor: 10羽のムクドリ

Rhukuniyón: 1 尾のヒメジ。chúkúún という種類（*Parupeneus trifasciatus*）に似ているが，sákánat という種類のヒメジ（*Parupeneus cyclostomus*）である。体色は黄色をしている。

Yoonomwarh: 2 尾のヒメジ。体色は黄色をしている。

Pareru: 2 頭のクジラ。尾の部分で体が合体している。

Yikefir: 1 尾のキントキダイ（*Priacanthus* sp.）

Yikisórh: 1 尾のキントキダイ

このあと，最終的にハタは Néén Anufa という架空の島の水路に逃げこみ，そこでとうとう捕まえられる。Néén Anufa は，Fanuwankuwen という島にある唯一の水路である。

上にのべたように，このハタは Pulusuk 島からは，最初，tupwun yúkúniik の方位上にあるサンゴ礁へと順番に逃げまわることになる。そして Ruwat から táán yúkúniik の方位に逃げつづける。そのさい，1つのサンゴ礁と Magur 島以外はすべて特定の名前と行動様式をもつ生物のいる場所になっている。漁師（あるいは航海者）からすると，ハタを追いかけるなかで，さまざまな生物に出くわすことになる。

4. Tunui Néén Anufa

この知識は別名で Pwukofi Fanuwankuwen ともよばれる。すなわちこれは，Fanuwankuwen という島からみて周囲のさまざまな方位にあらわれる島，サンゴ礁，生物現象などを網羅した知識といえる。Tunui Néén Anufa というのは，Anufa という名前の超自然的存在が，島のラグーン（néén）でココヤシの葉製の松明（たいまつ）をもちいて四方を照らしだし，それぞれの方位にある島や鳥，魚などについてのべるという内容になっている。tun は「松明」をあらわす。

Fanuwankuwen は，「トカゲの島」という意味で，場所や名称を同定することができない。この島の入り江がちょうどトカゲの形をしており，その一番奥にある砂浜にアジの群れが突っ込むという。これには，2人の航海者から情報をうることができた。

4-1. Rp

Fanuwankuwen から松明で照らしだされる方位ごとに出現する現象を，星座コンパスの方位番号順にあらわすと以下のようになる[1]。

方位番号9　Fainippwo という名前のサンゴ礁が出現する。このサンゴ礁はサンゴ石灰岩製の石ぎねに形が似ている。

方位番号11　Mesang という名前の島。この島から流木がサタワル島にながれてくると考えられている。流木の接岸を祈願する儀礼があり，その対象となる島。

方位番号12　Murilo 環礁

方位番号13　Sóón : Nomwin 島の近くにある島

方位番号14　Fananu 島

方位番号15　Onari 島

1）記載の順番は，ふつう方位番号9（ほぼ東に相当）から時計まわり（南→西→北→東）になっている。この方式は，現地で航海術の知識をまなぶさいにかならず踏襲されるきまりである。なお，方位番号のぬけている場合は，その方位になにもあらわれないことをしめし，記載もれではない。

方位番号16　Nomwin 島

方位番号17　Faieu 島

方位番号18　Pisaras 島

方位番号19　Ono 島

方位番号20　Magur 島

方位番号21　Erhérhemwar : 1 匹のおおきなエビ

方位番号22　Nósomwpwut : 1 羽の鳥（niréksarepwén）。尾の端は白く，おおきさは，手の甲くらいある。

方位番号23　Yitiina : 1 尾のおおきなサメ。波のうごきにあわせておよいでいる。

方位番号25　Piaineyarrhaan : サンゴ礁。砂地がある。

方位番号27　Marhipirhip : 1 尾のモンガラカワハギ。流木につく種類。

方位番号28　Yirhamolup : 1 本の流木。光っている。

方位番号29　Guam 島

方位番号30　Rota 島

方位番号31　Saipan 島

方位番号32　Wuwanimwar : 1 本のハテルマギリ（moesor: *Guettarda speciosa*）の木。長さは10センチくらい。

方位番号 1　Nitataporhow : 超自然的存在。サンゴ製の小型カヌーにのっている。Nitataporhow はそのカミの名前。

方位番号 2　Tipipi 島

方位番号 3　Rhópwokoilé : 超自然的存在。海の真ん中に立っている。
Tipap 島

方位番号 4　Niwawarennuk : 超自然的存在。シダ（rennuk: *Asplenium* sp.）製のカヌーにのっている。櫂は木製。

方位番号 5　Piairhakamwai : 砂地の堆。木がはえていない。

方位番号 6　Piairhakangali : 砂地の堆

方位番号 7　Nawerheiné : 超自然的存在。女性。

4–2.　Mg

別の航海者による情報を記述する。前記と同様に松明で照らしだされる方位は，星座コンパスの方位番号によってあらわすことにする。

方位番号11　Mesang : 島？
方位番号12　Tonimwar : 島？
方位番号13　Murilo 環礁
方位番号14　Fananu 島
方位番号15　Onari 島
方位番号16　Nomwin 島
方位番号17　East Fayu 島
方位番号18　Pisaras 島
方位番号19　Ono 島
方位番号20　Magur 島
方位番号21　Yikimwaan : 1尾のおおきなサメ。船を破壊する。
方位番号22　Nósomwpwut : 不明
方位番号23　Gaferut 島
方位番号25　Kafurhur 島
方位番号27　Wuwanimwarh : 場所。ハテルマギリの木の実がおおく浮かんでいる。
方位番号28　Guam 島
方位番号29　Saipan 島
方位番号30　Tipipi 島
方位番号31　Tipap 島
方位番号32　Niwawarennuk : 超自然的存在。シダ製のカヌーにのっている。
方位番号 1　Nitataporhow : サンゴ製の小型カヌーにのっている。
Nitataporhow はそのカミの名前。
方位番号 2　Yikipai : 不明
方位番号 3　Rhopwokoile : 不明
方位番号 4　Piaineyarraan : 砂地の堆
方位番号 5　Piairhakangali : 砂地の堆
方位番号 6　Piairhakamwai : 砂地の堆
方位番号 7　Nawerheiné : 超自然的存在

以上の2例をみると，架空の島であることを前提として，その周囲に存在する島じまやサンゴ礁，あるいは魚や鳥，その他の動物や超自然的存在が網羅的にしめされて

いる。島であっても，地図上で存在を確認することが不可能な島がふくまれている。

5. Serhakinimasaccha

Serhakinimasaccha という知識の項目は，もともと「トガリエビスの航海」という意味をあらわす。serhak は「航海」，masaccha は，トガリエビスという魚（*Sargocentron spiniferum*）をさす。

Serhakinimasaccha は別名で Semai ともよばれる。se- は前述した Senóng における場合とおなじ「つくる」という意味をあらわす。mai は，サンゴ石灰岩を V 字形に積み，潮の干満を利用して V 字型の中央部にあつまった魚をとる「石干見」である。石干見は太平洋一円に分布し，日本では沖縄の魚垣としてよくしられている。

5-1. Ep

この知識では，航海者が Puluwat 環礁を出発してつぎつぎと別の島やサンゴ礁を航海してゆく設定になっている。

Puluwat 環礁から tupwun mwáárikár，すなわち星座コンパスで28番の方位にゆくと Pikelot 環礁に到達する。Pikelot からぎゃくのコースをとり Puluwat 環礁にもどる。そこから真北（方位番号は 1 ）にすすむと Ruwat に到達する。Ruwat はサンゴ礁である。Ruwat から tupwun wuun（方位番号27）の方位にすすむと Pikelot 環礁につき，ふたたびぎゃくのコースで Ruwat にもどる。Ruwat から真北にすすむと Wotong に到達する。Wotong はサンゴ礁である。そこから tupwun máyinap（方位番号25）の方位にゆくと Pikelot 環礁にでる。Pikelot 環礁から táán máyinap（方位番号 9 ）の方位にゆき Wotong にもどる。

このようにして，Puluwat 環礁から北に 1 列にならんだサンゴ礁を順次移動し，Pikelot 環礁を往復するという航海をつづけ Naam というサンゴ礁に達する。その間の航海ルートは以下のとおりである。

Wotong から方位番号 1 へゆくと，Merhoppwun というサンゴ礁に到達する。
Merhoppwun から方位番号23へゆくと，Pikelot 環礁につく。
Pikelot 環礁から方位番号 7 へゆくと，Merhoppwun にもどる。
Merhoppwun から方位番号 1 へゆくと，Pisaf というサンゴ礁に到達する。
Pisaf から方位番号22へゆくと，Pikelot 環礁につく。
Pikelot 環礁から方位番号 6 へゆくと，Pisaf にもどる。
Pisaf から方位番号 1 へゆくと，Piafé というサンゴ礁に到達する。

Piafé から方位番号21へゆくと，Pikelot 環礁につく。
Pikelot 環礁から方位番号 5 へゆくと，Piafé にもどる。
Piafé から方位番号 1 へゆくと，Naam というサンゴ礁に到達する。
Naam から方位番号20へゆくと，Pikelot 環礁につく。
Pikelot 環礁から方位番号 4 へゆくと，Naam にもどる。

これとほぼ似たようなやりかたで，こんどは Puluwat 環礁から星座コンパスで方位番号 3 の方位にすすむと Ulul 島に到達する。ここからぎゃくのコースでいったん Puluwat 環礁にもどり，そこから北にゆき，さきほどの Ruwat にでる。Ruwat から方位番号 4 にすすむと Ulul 島に到達する。Ulul 島から方位番号20にすすみ，Ruwat にもどる。このようにして Ulul 島を往復しながら北にすすみ，最終的に Naam に到達する。その間の航海ルートは以下のとおりである。

Ruwat から方位番号 1 へゆくと，Wotong に到着する。
Wotong から方位番号 5 へゆくと，Ulul 島につく。
Ulul 島から方位番号21へゆくと，Wotong にもどる。
Wotong から方位番号 1 へゆくと，Merhoppwun に到達する。
Merhoppwun から方位番号 6 へゆくと，Ulul 島につく。
Ulul 島から方位番号22へゆくと，Merhoppwun にもどる。
Merhoppwun から方位番号 1 へゆくと，Pisaf に到達する。
Pisaf から方位番号 7 へゆくと，Ulul 島につく。
Ulul 島から方位番号23へゆくと，Pisaf にもどる。
Pisaf から方位番号 1 へゆくと，Piafé に到達する。
Piafé から方位番号 9 へゆくと，Ulul 島につく。
Ulul 島から方位番号25へゆくと，Piafé にもどる。
Piafé から方位番号 1 へゆくと，Naam に到達する。
Naam から方位番号11へゆくと，Ulul 島につく。
Ulul 島から方位番号27へゆくと，Naam にもどる。

このような航海がなぜ Serhakinimasaccha とか Semai という名前でよばれるのだろうか。図 3 をみると，Puluwat 環礁から北側にのびる直線を境として Pikelot 環礁側と Ulul 島側における航路を直線によってむすぶと，ちょうど，魚の背びれのような形状になる。トガリエビスという魚は，じっさいにみるとわかるようにたいへんめだ

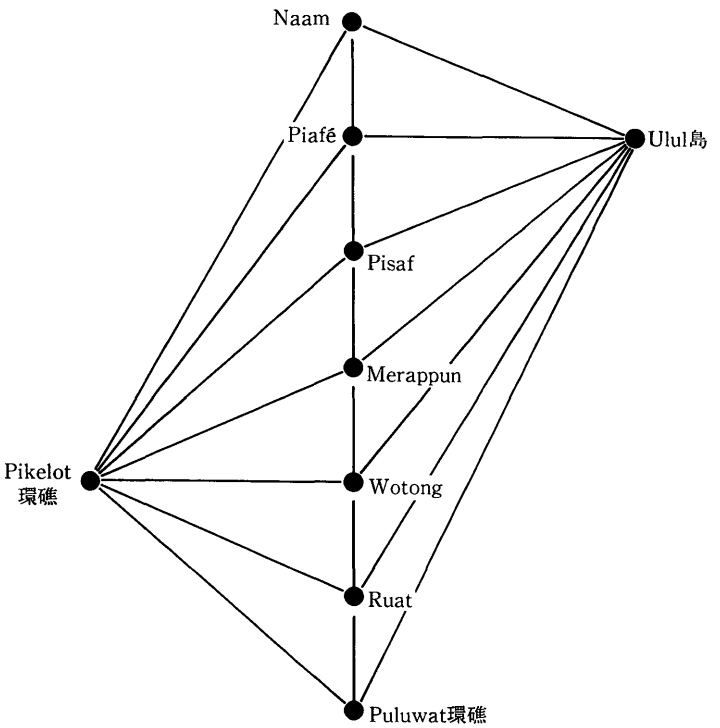


図3　Serhakinimasaccha の航海の模式図

つおおきな背びれをもっている。つまり，航海のルートが魚の形態的な特徴に類似していることからそのように名づけられたのである。

魚を追い込むさいのV字形をした石干見としてみると，Pikelot 環礁や Ulul 島は，その中心部に相当することに気づく。たとえば，Pikelot 環礁，Puluwat 環礁，Ruwat がつくる三角形を考えてみればよい。航海のルートが石干見に類似した形をつくりだしていることがよくわかる。

6. Ripweripwen Anan Aniairhé

Ripweripwen Anan Aniaihré ということばのうち，ripweripwen は riipw，つまり「ジグザグ」のことを，anan は「食物」，ani は魚の「ハタ」をそれぞれあらわす。-airhe の意味は不明である。

もともとココヤシの1枚の葉を「つづら織り」にしてひらくとジグザグ状になる。ripweripwen は航海自体がジグザグにすすむことをさすとおもわれるが，以下にみる

ようにそうした航路がしめされているわけではない。Riesenberg の調査からもはっきりとしたことが確認されていない [RIESENBERG　1976: 106–107]。

いずれにせよ内容からすると，この知識は Puluwat 環礁を出発していくつもの島じまやサンゴ礁，あるいは魚や鳥などの自然現象に出会いながら航海をするという内容になっている。おおきくわけると，Puluwat 環礁から Pulusuk 島までの航海，Pulusuk 島から Ulul 島までの航海，Ulul 島から Fanuwankuwen という架空の島までの航海にわかれる。この知識は，1人の航海者のみから情報をえることができた。

6–1.　Mg

Puluwat 環礁からの航路を星座コンパスの方位番号にしたがってのべる。

方位番号17

Yipwun: 1羽の鳥で，niréksarepwén という種類の鳥である

Sówkarimw: 1羽のカツオドリ

Sówkerhap: 1尾のマグロ

Saumwor: 2尾のシイラ

Yépengak: サンゴ礁で，Pulusuk 島と Puluwat 環礁の中間にある

Pulusuk 島からは，進路を星座コンパス上で30番の方位にとる。

方位番号30

Pwukuwan ngusungusu: サンゴ礁

Pwukuw yenanai: サンゴ礁

Wupwanimai: サンゴ礁

Wurourhan: サンゴ礁

Ruwatan yapinanei: サンゴ礁

Ruwatan yapinanei からは，進路を方位番号4にとる。

方位番号4

Ruwatan fenarik: サンゴ礁

Pairher: 1尾のちいさなサメ

Rafimwarh: nikak という鳥が1列になって飛んでいる。この状態を pungupanei とよぶ。

Wunowun: Ulul 島

Ulul 島からは引き続き，進路を方位番号4にとる。

方位番号4

Makur: Magur 島

Sawtaw: 不明

Anniyon: 不明

Yonomwarh: 1頭のクジラ

Rhikiniyoon: 不明

Rhororhor: 約10羽のムクドリ

Pareru: 2頭のクジラ。跳躍したとき，それぞれの尾がふれあっている。

Paramwarei: 1頭のクジラ。通常のクジラの尾は水平についているのに，このクジラの尾は魚とおなじように垂直についている。

Yikefir: 1頭のクジラ。褐色をしている。

Yikisórh: 1尾のキントキダイ（nupóów: *Priacanthus* sp.）

Ayukinómw: 1羽のおおきなグンカンドリ

Néén Anufa: Fanuwankuwen という同定不明の島

7. Féfén Perhan Ayufan

Féfén Perhan Ayufan は，想像上の航海にかかわる知識である。féfén は，「しばる，くくる」，perhan は「魚の尾」，Ayufan というのは超自然的な存在の固有名である。

7-1. Ep

この航海では，Puluwat 環礁を出発して真南に航海し，Yepengak というサンゴ礁にでる。ここからさらに南に進路をとり，Pulusuk 島に到達する。Pulusuk 島から，星座コンパス上で30番の方位にすすむと，Pwukuw yenainai というサンゴ礁に到達する。このようにして，つぎつぎと島から島へ，サンゴ礁からサンゴ礁へ，あるいは島からサンゴ礁へと移動する。

星座コンパスの方位番号にしたがって，この航海のルートを順番にのべる。

Puluwat 環礁を出発。

Puluwat 環礁より	方位番号17	Yépengak: サンゴ礁
Yépengak	方位番号17	Pulusuk 島
Pulusuk 島	方位番号30	Pwukuw yenainai: サンゴ礁
Pwukuw yenainai	方位番号30	Pwukuw mwormwoor: サンゴ礁
Pwukuw mwormwoor	方位番号30	Pwukuw nónó: サンゴ礁
Pwukuw nónó	方位番号30	Pwukuw aininginfaor: サンゴ礁

Pwukuw aininginfaor	方位番号30	Apinipin: サンゴ礁
Apinipin	方位番号30	Afatinwupwanmai: サンゴ礁
Afatinwupwanmai	方位番号30	Wurhourhan: サンゴ礁
Wurhourhan	方位番号 4	Puluwat 環礁
Puluwat 環礁	方位番号30	Ruwat: サンゴ礁
Ruwat	方位番号 4	Ulul 島
Ulul 島	方位番号 4	Magur 島
Magur 島	方位番号20	Ulul 島
Ulul 島	方位番号 5	Sakurhupworh: サンゴ礁
Sakurhupworh	方位番号21	Ulul 島
Ulul 島	方位番号 6	Ono 島
Ono 島	方位番号22	Ulul 島
Ulul 島	方位番号 7	Onari 島
Onari 島	方位番号23	Ulul 島
Ulul 島	方位番号10	Pisaras 島
Pisaras 島	方位番号 8	East Fayu 島
East Fayu 島	方位番号11	Nomwin 環礁
Nomwin 環礁	方位番号 6	Onari 島，Ruwat: サンゴ礁
Onari 島	方位番号 5	Murilo 環礁
Murilo 環礁	方位番号21	Truk 環礁
Truk 環礁	方位番号 4	Perhan Ayufan: 水路
Mwókucchis に到達。		
Mwókucchis	方位番号 3	Magurhitam: 水路
Magurhitam	方位番号19	Mwókucchis: 水路
Mwókucchis	方位番号 2	Nomwin 環礁
Nomwin 環礁	方位番号18	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号 1	Fan wanewan: 場所
Fan wanewan	方位番号17	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号32	Nemónféi: 1匹のトンボ
Nemónféi	方位番号16	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号31	East Fayu 島
East Fayu 島	方位番号 5	Mwókucchis

Mwókucchis	方位番号30	Soromorhom: 1尾のサメ
Soromorhom	方位番号14	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号29	Pisaras 島
Pisaras 島	方位番号13	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号28	Ulul 島
Ulul 島	方位番号12	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号27	Pulap 島
Pulap 島	方位番号11	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号25	Puluwat 環礁
Puluwat 環礁	方位番号 9	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号23	Wurhourhan: サンゴ礁
Wurhourhan	方位番号 7	Mwókucchis
Mwókucchis	方位番号22	Pulusuk 島

上記の記述にあるように，Murilo 環礁から星座コンパス上の21番の方位にいくと Truk 環礁に到達する。ここから方位番号 4 にすすむと，Truk 礁湖の水路である Mwókucchis につく。この場所が Perhan Ayufan，すなわち「Ayufan の尾」とよばれる。

この水道からさらに，方位番号 3 のほうにすすむと Magurhitam という水路につく。ここから，いったんもとの Mwókucchis にもどる。Mwókucchis から方位番号 2 にすすむと，Nomwin 環礁につく。Nomwin からふたたび Mwókucchis にもどる。こんどは Mwókucchis から真北（方位番号 1 ）にゆくと，Fan wanewan という実態不明の場所に出る。ここから Mwókucchis にもどる。このようにして，つぎつぎと航海をつづけ，Pulusuk 島に到着してこの旅は終わる。

8. Fééé Yiyas

Fééé Yiyas の fééé は「結ぶ」，yiyas はパンノキの実を採集するときの「引っ掛け具」をそれぞれさす。yiyas は，長さ 5–6 メートルの竹竿のさきに木製のかぎをココヤシロープで固定したものである（写真 2 ）。パンノキの樹上に登った男性がこの引っ掛け具を使って竹竿の先端にあるかぎを使い，パンノキの果実を地上におとして採集する。パンノキの実以外に，faniyáp，nggo などとよばれる果実の採集にももちいられるが，なかでもパンノキの実が主要な採集物となっている。

写真2　パンノキの実の採集具，yiyas

Fééi Yiyas という知識は，島からある方向にちょうどこのさおを伸ばすように航海すると，異なった島やサンゴ礁，あるいは鳥や魚がつぎつぎと出現する。別の方向にこのさおをのばすと，異なった島や生物が引っ掛かる（出現する)。航海の途中に出現する鳥や魚は，総称して yeparh とよばれる [秋道　1984]。このように，特定の方位に出現する島や yeparh を Fééi Yiyas という知識のなかで言及してゆくわけである。Satawal 島では，1人の航海者から Fééi Yiyas にかんする2つの事例をあつめることができた。

8–1.　Yiyasan fan wenewenenup me wói Sowuk　Ep

Pulusuk 島から周囲のあらゆる方向にパンノキの採集具をのばすようにして，引っ掛かる島や yeparh をのべたものである。

Pulusuk 島から真南（方位番号17）に yiyas をのばすと，以下のような島や yeparh が順番に引っ掛かる。

Rhówukmwarh: 1羽のムクドリ

Rééman: 海面に浮かんでいるパンノキの葉

Rimwiwow: Paennai という1羽の鳥。頭を南に向けている（rimwinó yéér)

Rimwinong: Paennai という1羽の鳥。頭を北に向けている（rimwinó yefáng)

Wononimwaan: 1尾のおおきなサメ

名前なし：1匹のエビ（筆者註：このエビは yuur と一般によばれるニシキエビの仲間）

Tam: カヌーの浮き木。流木のような形をしている。

Sikówmwarh: 1個のトウカムリガイ（mweyan: *Cassis cornuta*）。この場所で航海者はカヌーを停泊して碇をうつ。砂地の場所。

ここから，星座コンパスの方位番号4に yiyas をのばすと，以下のような砂地や昆虫が引っ掛かる。

Pisisawirhor: ホラガイ（sawi: *Charonia tritonis*）。ホラガイはすぐれた航海術の知識をもつ（航海者）Panunap がもつものとされている。

Piainigafenak: 砂地

Piymwarei: 砂地

Piywownaarh: 砂地

Pianmwur: 砂地。この砂地には，mwur，すなわち黒い石がある。この石は流れてきたもので砥石用に使われる。

Pian wuwan: 砂地。wuwan というのは，ヤマノイモの形をした実で種子（たね）がおおい。

Ngungu: 虫の群れ。形はハエにて，ハエよりもおおきい。ハチか？

Nganga: 虫の群れ。ハチか？

Pikirham: Kapingamarangi 環礁

Nikosu: 貝（nifaifai）。この場所で風が舞っている。

Setemoton: 海の渦巻き

Amwarh: サメの群れ（wian pááw）

Fonapei: Ponphei 島

ここから，yiyas を星座コンパスの方位番号9の方位にのばすと，以下のような島や yeparh が引っ掛かる。

Raluwiti: Marshall 諸島

Raluk: Marshall 諸島（筆者註：Marshall 諸島の Ralik chain とおもわれる）

Ratak: Marshall 諸島（筆者註：Marshall 諸島の Ratak chain とおもわれる）

Ferairhop: Marshall 諸島の端にある島

Yikaniwurham: 1尾のメガネモチノウオ（máám: *Cheilinus undulatus*）という魚

Woreiyéén: 1尾のバラハタ（pwene: *Variloa louti*）という魚

Alen: 島

ここから，yiyas を星座コンパスの方位番号31の方位にのばすと，以下のような島や yeparh が引っ掛かる。

Wooyal: ちいさな島

Pwayón: 魚と鳥の群れ（pwa）

Lupwuyóng: 1羽のグンカンドリ（yasaf）

Mesang: 島（筆者註：Ep によると，Hawaii かもしれないという）

ここから，yiyas を星座コンパスの方位番号25の方位にのばすと，以下のような島や yeparh が引っ掛かる。

Peinwotót: 海面に浮かぶ浮遊物（pei）。パンノキ（mááy: *Artocarpus* sp.），タコノキ（faarh: *Pandanus tectorius*），オオハマボウ（kinifé: *Hibiscus tiliaceus*）などの流木があつまったもの。
（筆者註：wotót は，「きれいにする」の意味）。

Motokiyleyan: 静かな海のなかで，波だっている場所（mesai saat）。（筆者註：mesai は「目」の，saat は「海」の意味）

Séépai: 1尾のサメ

Sóón: ちいさな島。Murilo 環礁から北東くらいの方位に位置する。

Suwalew: ツムブリ（foofo: *Elagatis bipinnulatus*）という魚の群れ（cchon foofo）

Makur: Magar 島

Yitiiló: 1尾のサメ

Rhayumwené: 1尾のアイゴ（wumwuné: *Siganus* sp.）。大きさは，手の先から上腕部の付け根くらいまである。

Tipwaisat: 1匹のエビ（yuurhrap: *Parribacus* sp.）

Faieu: Gaferut 島

Nasutow: 1匹のチョウ（nipwoipok）

Fais: Fais 島

Malimok: 1尾のサメ

Yaap: Yap 島

Faipwi: サンゴ礁。このサンゴ礁に石が1個ある。

Lumwarhap: 海藻（lumw）のかたまり

Lumwtow: 海藻のかたまり。遠いところにある。

Yikipwer: 1頭のクジラ。色は白い。

Yikiron: 1頭のクジラ。色は黒い。

Tawsineta: 水道。sineta は，もともと「島がない」ことをあらわす。おそらく，台湾とフィリピンとのあいだの海のことをさす。

ここから，つぎつぎと方位をかえて yiyas をのばす。まず，星座コンパス上の方位番号13にゆく。

Pwanaw: Palau 諸島

方位番号 8 にのばす。

Ngénuw: Ngulu 環礁

Seróón: Sorol 島

方位番号11にのばす。

Weneya: Woleai 環礁

方位番号 9 にのばす。

Yenóót: Elato 環礁

Nómwéchok: Lamotrek 環礁

方位番号10にのばす。

Satawal: Satawal 島

方位番号12にのばす。

Sowuk: Pulusuk 島

8–2.　Yiyasan anai Sów Kafurhur　Ep

この知識は，架空の Kafurhur という島から周囲に yiyas をのばしたときに引っ掛かる島，サンゴ礁などを網羅したものである。Sów Kafurhur というのは，Kafurhur 島の人で，Sów というのは称号である。すなわち，Sów Kafurhur は Kafurhur 島でもっとも位の高い人をさす。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位19番に yiyas をのばすと， Yap 島が引っ掛かる。つぎに panang，すなわち石貨をこの yiyas の先につけて Sów Kafurhur がすむ Kafurhur 島の家のほうにむけて投げかえす。このことを areitiw nukunu yimai Sów Kafurhur とよぶ。この動作は，Yap 島から方位番号 3 の Kafurhur 島にもどることをさしている。

ふたたび，Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号19に yiyas をのばすと，こんどは Ngulu 環礁が引っ掛かる。この島では kiin とよばれるベッコウと貝製ビーズでできた女性用の腰ベルトを Kafurhur のある方位番号 3 のほうに投げかえす。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号15に yiyas をのばすと， Ulithi 環礁が引

っ掛かる。ここからは，wunowunot，すなわちけずったコプラにヤシ酒を煮つめてできるキャンディー（núúr）をまぜた食物を Kafurhur 島に投げかえす。wunowunot は，Ulithi 環礁の主食とされている。

ふたたび，Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号15に yiyas をのばすと，こんどは Sorol 島が引っ掛かる。Sorol 島からは，ウミガメ（wong）を Kafurhur 島に投げかえす。このカメは wongiy Seróón とよばれる。このウミガメがアオウミガメかタイマイのどちらをさすのかは不明である [秋道　1984]。

Kafurhur 島から星座コンパスの方位番号14に yiyas をのばすと，Eaurupik 環礁が引っ掛かる。ここからは，メスのウミガメの甲羅（sakuni wong）が Kafurhur 島に投げられる。このウミガメは sakuni Yoorhpik とよばれる。ウミガメの甲羅はかつて saak とよばれたが，現在は pwoor であり，pworani wong と称される。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号13に yiyas をのばすと，Fais 島に引っ掛かる。この島からは，タバコが投げられる。このタバコのことを supani Fais とよぶ。

やはり星座コンパス上の方位番号14に Kafurhur 島から yiyas をのばすと，こんどは Woleai 環礁に引っ掛かる。この島からは，魚のアジ（bati: *Decapterus* sp.）が Kafurhur 島に投げかえされる。このアジのことは batin Weneya，あるいは Woleai の魚（yikan Weneya）とよばれる。

さらに Kafurhur からふたたび星座コンパス上の方位番号14に yiyas をのばすと，Meróól という名前のサンゴ礁に引っ掛かる。このサンゴ礁からは，yayúm という魚が Kafurhur 島に投げかえされる。この魚はメナダ属のボラ（*Liza* sp.）である。この魚は Meróól の魚（yikan Meróól）とよばれる。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号12に yiyas をのばすと，Fareulap 島が引っ掛かる。この島からはツムブリ（foofo）が Kafurhur 島に投げかえされる。この魚のことは，Fareulap の魚（yikani Fareunap）とよばれる。

やはり Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号12に yiyas をのばすと，こんどは Satawal 島が引っ掛かる。Satawal 島からは，ベラの一種（yariiné）が Kafurhur 島に投げかえされる。このベラは Satawal の魚（yikai Satawal）と称される。このベラは，セナスジベラの種類（*Thalassoma* sp.）である。

引き続いて，Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号12に yiyas をのばすと Pulusuk 島が引っ掛かる。Pulusuk 島からは，パンノキの実（mááy）が投げかえされる。このパンノキは，有種子のものである。

さらに Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号12に yiyas をのばすと，

Namoluk 環礁が引っ掛かる。この環礁からは，赤い石（fai par）が投げかえされる。この石の役割は不明であった。また，Namoluk の石という意味で fai parai Namwonuk と称される。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号11に yiyas をのばすと，Gaferut 島が引っ掛かる。この島からは，ウミガメが Kafurhur 島に投げかえされる。このカメのことを Gaferut のウミガメ（wongin Faiew）と称する。このウミガメも，アオウミガメかタイマイかは不明である。

ふたたび Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号11に yiyas をのばすと，Pikelot 環礁が引っ掛かる。この島からもウミガメが Kafurhur 島に投げかえされる。Pikelot 環礁のカメのことは，wongin Piik とよばれる。このウミガメは，アオウミガメかタイマイかは不明である。[秋道　1984]。

つづいて Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号11に yiyas をのばすと，Pulap 島が引っ掛かる。Pulap 島からは，魚のアジ（bati）が Kafurhur 島に投げかえされる。Pulap の魚は，yikani Ponnap とよばれる。

もう1回，Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号11に yiyas をのばすと，Truk 環礁のちかくにあるサンゴ礁島が引っ掛かる。この島は Téén woróyéérh とよばれ，ここからココヤシのかたい果実が Kafurhur 島に投げかえされる。この島のコプラのことは，rhooi Téén woróyéérh とよばれる。

Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号9に yiyas をのばすと，Fanuwankuwen という島が引っ掛かる。ここに Ranunukuwen というグンカンドリ（yasaf）がいる。これを Kafurhur 島に投げかえす。Ranunukuwen の ranunu は，「水，池」，kuwen は「トカゲ」の意味である。Ep はこの島を日本の南鳥島と想定している。この島のグンカンドリは，yasafan Ranunukuwen と称される。

最後に，Kafurhur 島から星座コンパス上の方位番号6に yiyas をのばすと，Malialis という島が引っ掛かる。Satawal 語では Mariisu とよばれるこの島は Mariana 諸島の Guam 島である。この島からは，タバコが Kafurhur 島のある方位番号22の方位に投げかえされる。この島のタバコは，supan Malialis とよばれる。

Ⅲ．考察——同定と比較

1．知識項目の重複

前章であげた知識のなかには，実在する島以外に，実在することをたしかめることが困難とおもわれるものもふくまれている。しかしこの段階で，後者の例をすべて架空のもの，未確認のものとしてのみあつかってよいだろうか。

もしも，個別の知識項目を越えて，複数回，とりあげられている知識項目があるとすれば，それなりの意味づけをすることができるのではないだろうか。

こうした点から，とくに生物現象やサンゴ礁のなかで，異なった知識項目のあいだで何度か言及されている重複例を丹念にさがしてみることにした。

そこで本論でとりあげた8つの知識項目に登場するサンゴ礁や自然現象にくわえてこれまで筆者自身が発表した Woofanuw, Pwukof, Pwuupwunapanap の知識項目にふくまれる事例をくわえて検討した。その結果，異なった情報提供者，異なった知識項目間で言及されている事例は非常にすくないことがわかった。ただし共通する例もあるので，それらについて個別的にとりあげてみよう。

（1）Merhoppwun（サンゴ礁）

Serhakinimasaccha のなかで，Merhoppwun が登場する。おなじ名称のサンゴ礁は，Ulul 島の Pwukof のなかで，Ik と Rp によってあげられている [秋道　1988: 167–168]。しかし，いずれも方位番号は23である。Serhakinimasaccha では Merhoppwun が Ulul 島から方位番号22に位置するとされているので，情報がズレていることになる。

（2）Piafé（サンゴ礁）

Serhakinimasaccha のなかで，Piafé が登場する。おなじ名称のサンゴ礁は，Ulul 島の Pwukof のなかで，Rp によってあげられている [秋道　1987: 168]。Ulul 島から出現するとされる方位は番号で28であり，Serhakinimasaccha では方位番号25に Piafé が登場する。この場合も，情報が両者間でズレている。

（3）Raluwiti（マーシャル諸島の島）

Raluwiti は，Féé Yiyas のなかで登場する。すなわち Pulusuk 島から方位番号9に yiyas をのばすと Raluwiti が出現する。一方，Ponphei 島の Woofanuw でも方位番号9の方位に Raniwit が出現する [秋道　1984: 686]。Raluwiti（Raniwit）は，

Woofanuw のなかでは Jaluit 環礁の可能性がある。

（4）Rhayumwené

Rhayumwené は，Féé Yiyas のなかで登場する。すなわち Pulusuk 島から方位番号9に yiyas をのばすと Rhayumwené が出現する。これは1尾のアイゴとされている。一方，Pwukof のなかでは，Ulul 島から方位番号11に Rayumwané が登場する。これは1頭のクジラとされている。

（5）Rhesatikimwiy

Rhesatikimwiy は Rhéaniy の知識に出現する。すなわち Pulusuk 島から最初，方位番号30にゆき，さらに方位番号4にむきをかえた海域で出現する2羽のムクドリをさす。おなじ名称のものは，Pwukof の知識でも言及されている。1つは，Truk 環礁で方位番号23の方位に出現し，5羽のムクドリと5羽のサギであるとされている [秋道　1987: 169]。もう1つは，やはり Truk 環礁の Pwukof で，方位番号はおなじ23であるが，実態は1羽のサギであり鳴いていないという特徴をもつとされている [秋道 1987: 168]。

（6）Rhororhoor

Rhororhoor も Rhéaniy の知識に出現する。すなわち，Rhesatikimwiy からおなじように táán yúkúniik（方位番号4）にすすむと出現する。実態は，10羽のムクドリとされている。一方，Rhororhoor は Ulul 島の Pwukof にも出現する。すなわち，Ulul 島から方位番号3にゆくと，Rhororhoor という固有の名前をもつ1羽のムクドリに出くわす。

（7）Rhoukmwarh

Rhoukmwarh は，Féé Yiyas に登場する。すなわち，Pulusuk 島から方位番号9に yiyas をのばすと，Rhoukmwarh という固有名をもつ1羽のムクドリに出くわす。Rhoukmwarh は，Pulusuk 島の Pwukof のなかで方位番号17，すなわち真南にすすむと出現するとされている [秋道　1987: 162–163]。情報提供者によって，それが1羽のムクドリであったり，1羽のグンカンドリであったり，数不明のムクドリであったりして，実態にかんする情報はバラついている。

（8）Sakurhupworh

Sakurhupworh は，Féfén Perhan Ayufan のなかで，Ulul 島から方位番号5にすすむと出くわすサンゴ礁であるとされる。Sakurhupworh は，Pwukof のなかで Ulul 島から方位番号5にすすむと出くわすサンゴ礁でもある [秋道　1987: 167]。この場合は，両方の知識内容がまったく一致している。

（9）Wotong

Wotong は，Serhakinimasaccha のなかで出現するサンゴ礁である。すなわち，Ulul 島から方位番号21に Wotong があらわれる。Wotong は，Ulul 島や Puluwat 環礁の Pwukof に出現する。たとえば，Ulul 島から方位番号23，ないし27に Wotong があらわれる [秋道　1988: 167–168]。この場合，Ulul 島から Wotong が出現する方位の情報にはズレがある。

Woofanuw のなかでは，Puluwat 環礁で方位番号 7 に Wotong が出現する [秋道 1984: 674]。

（10）Wurhourhan

Wurhourhan は，Rhéaniy の知識のなかで，Pulusuk 島から方位番号30にすすむなかで登場する。また，Féfén Perhan Ayufan のなかでは，Puluwat 環礁から方位番号17，30へとすすむさいに登場するサンゴ礁である。Wurhourhan は，Pwukof のなかでも Pulusuk 島，Puluwat 環礁，Pulap 島，Satawal 島にかんする知識のなかで言及されている。すなわち，Pulusuk 島では，方位番号30ないしは14に，Puluwat 環礁では方位番号20に，Pulap 島では方位番号21に，Satawal 島では方位番号11にそれぞれ Wurhourhan が出現する [秋道　1988: 157, 158, 161–163, 165]。

Woofanuw のなかでも，Puluwat 環礁から方位番号20に，Truk 環礁の方位番号23に Wurhourhan が出現する [秋道　1984: 675, 682]。

この場合，Pulusuk 島から方位番号30にゆくと Wurhourhan に出会うという情報は一部で一致するだけである。

（11）Tipipi

Tunui Néén Anufa という知識のなかで Fanuwankuwen という島から方位番号 2，ないし30に出現するとされる島である。

Pwukof のなかでは，Gaferut 島から方位番号 5 に出現する [秋道　1988: 155]。

Woofanuw のなかでは，Gaferut 島で方位番号 5 に出現する [秋道　1984: 666]。

（12）Tipap

Tunui Néén Anufa という知識のなかで Fanuwankuwen という島から方位番号 3，ないし31に出現するとされる島である。

Pwukof のなかでは，Gaferut から方位番号 6 に出現する [秋道　1988: 155]。

Woofanuw のなかでは，Gaferut 島で方位番号 6 に出現する [秋道　1984: 666]。

（13）Kafurhur

Tunui Néén Anufa という知識のなかで Fanuwankuwen という島から方位番号25な

いし31に出現するとされる島である。

Pwukof のなかでは，Gaferut 島から方位番号27に出現する [秋道　1988: 155]。Woofanuw のなかでは，Yap 島で方位番号 3 に，Ulithi 環礁から方位番号31に，Gaferut 島から方位番号27に出現する [秋道　1984: 660–661, 667]。Pwuupwunapanap では，Rp，Ew，Ep により，海面に浮かぶおおきなモンガラカワハギの尾びれに相当するとされている [秋道　1981b: 14–19]。

（14）Fanuwankuwen

Ripweripwen Anan Aniairhé のなかで Puluwat 環礁から方位番号 1，30，4，とすすむなかで最終的に到達するとされている。Rhéaniy のなかでも，Pulusuk 島を出発してハタを追いかけて最終的に魚を突く場所が Fanuwankuwen の水路であるという設定になっている。この島は，Tunui Néén Anufa という知識項目で中心になる島でもある。Woofanuw のなかでは，Gaferut 島で方位番号 7 に出現する [秋道　1984: 666]。Pwuupwunapanap では，Rp，Ew，Ep によって，海面に浮かぶおおきなモンガラカワハギの頭部に相当するとされている [秋道　1981b: 14–19]。

なお，Satawal 島以外の Woleai 環礁や Puluwat 環礁における調査報告においても，Kafurhur と Fanuwankuwen が Pwuupwunapanap の知識において，それぞれ魚の尾部と頭部の位置するとされている点はおなじである [Alikire　1970; Riesenberg 1976]。

2. 地図的展開

これまでのべた知識の記述内容は，じっさいの海図上でどのような航路に対応するのだろうか。第Ⅱ章 8. の Féé Yiyas はある島から周囲にあるとされる島やサンゴ礁，あるいはさまざまな現象を網羅したもので，Woofanuw，Pwukof，Tunui Néén Ayufan の知識と類似している。一方，そのほかの知識はいずれも島から島へ，あるいはサンゴ礁からサンゴ礁へという移動を主要な内容としている。これらを図式的にあらわすといったいどのようなことがわかるのだろうか。本項では，第Ⅱ章 1. から 7. までの知識項目にかかわる内容を具体的な図として平面上にあらわし，その結果について考察をくわえる。

（1）Senóng

Senóng のなかで，クジラの居場所は島の真南にあるというだけで特定化されていない。図 2 は模式図であるが，じっさいの海図上に島の位置を配置してあらわすと，

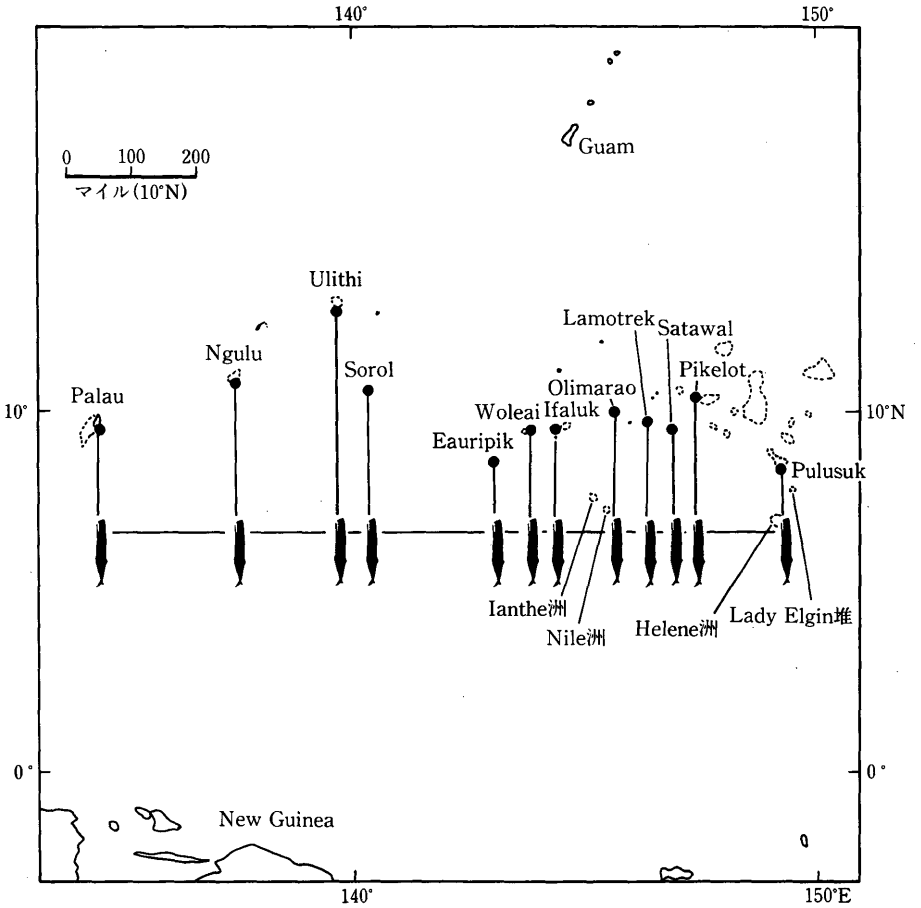


図4　Senóng の地図的展開

図4のようになる。それぞれの島の真南にクジラがいると想定して問題となるのは，緯度である。どの緯度にクジラがいると考えるかはあまり意味のないことかもしれない。しかし一つの考え方として，すくなくとも Pulusuk 島から Woleai 環礁にいたるあいだには，北緯 5–6 度周辺にいくつもの浅瀬があり，波のうねりが観察される。これらのうねりをクジラと想定してみることは奇想天外なことだろうか。

（2）Yarhuwów

Yarhuwów にしめされた航路を具体的な地図上にあらわしたのが図5である。これによると，この知識は Puluwat 環礁と Kosrae 島とのあいだにあるおおくの島じまをふくんでおり，実際の航海にも想定できる順番に出現する。この知識が単に記憶する

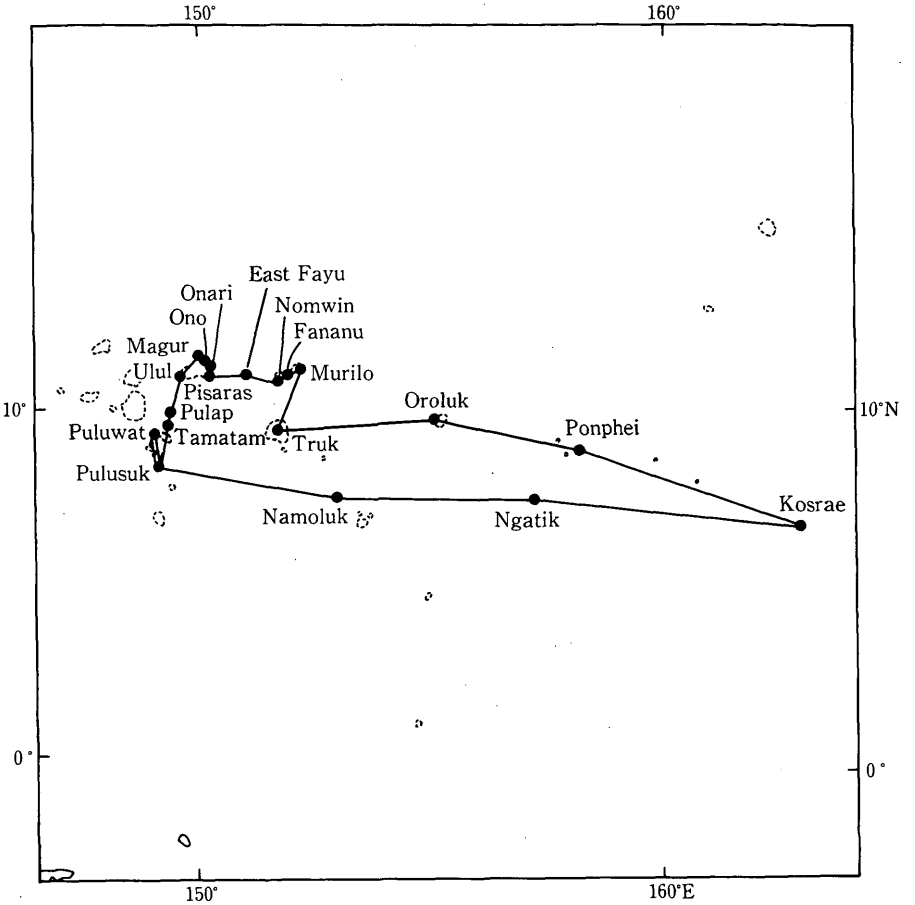


図5　Yarhuwów の地図的展開

ためではなく，島じまの地理的な位置関係をしるうえでも有用な知識であることが示唆される。

（3）Rhéaniy

Pulusuk 島を出発して Magur 島に到達するまでのあいだに出現するサンゴ礁の位置を，海図に具体的にプロットすることはむつかしい。しかし，Pulusuk 島から方位番号30（コンパス方位で327°）と4（コンパス方位で33°）の方位関係から［秋道 1981a: 630], Ruwat のおおよその位置をもとめることができる。

作図してみると，Ruwat はサンゴ礁や堆や礁のうえに位置しないことになる。ただし，知識内容にしめされた方位に航海のさいに生じる 10° 程度の誤差をみこんでみ

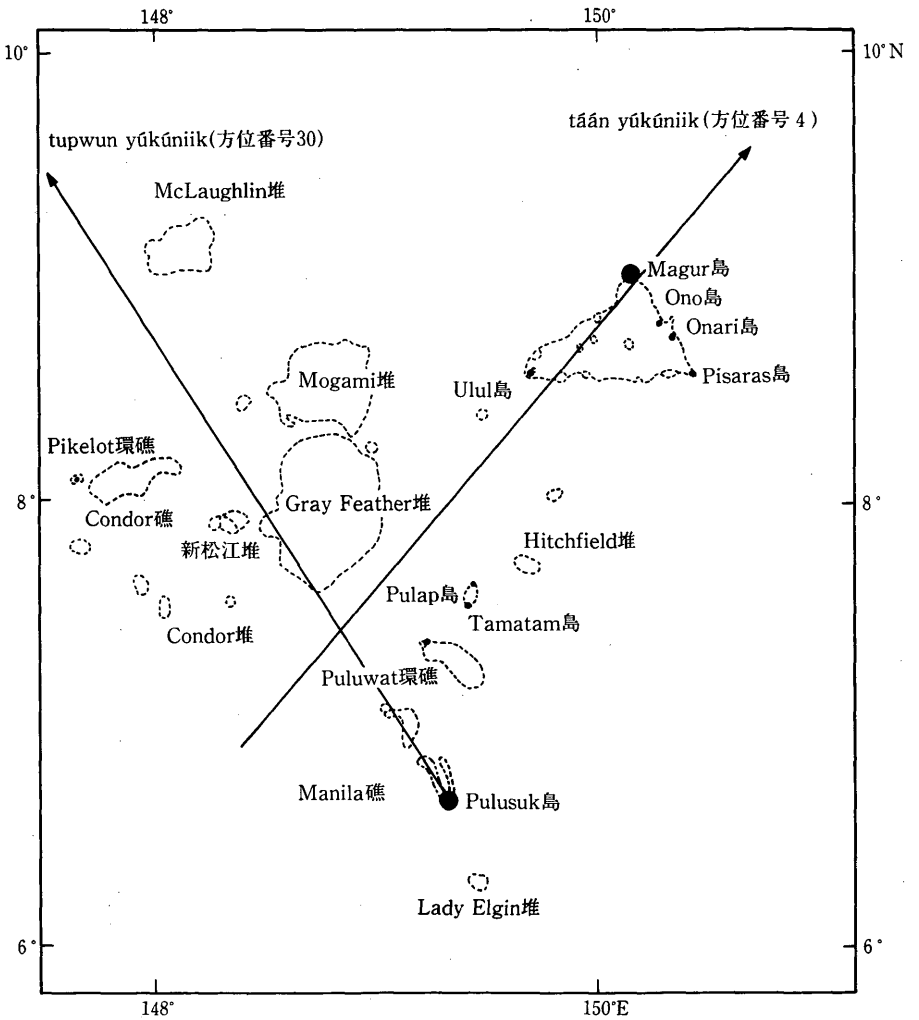


図6　Rhéaniy の地図的展開

ると，Ruwat は確実に Gray Feather 堆にあたることになる（図6）。

（4）Tunui Néén Anufa

この知識の中心である Fanuwankuwen 島自体の場所を同定できない。しかし，Fanuwankuwen からみた Murilo 環礁，Onari 島，Nomwin 環礁，East Fayu 島，Pisaras 島，Ono 島，Magur 島，Guam 島，Rota 島，Saipan 島などの島じまの方位関係がわかっている。これからぎゃくに Fanuwankuwen の場所を推定することができる。

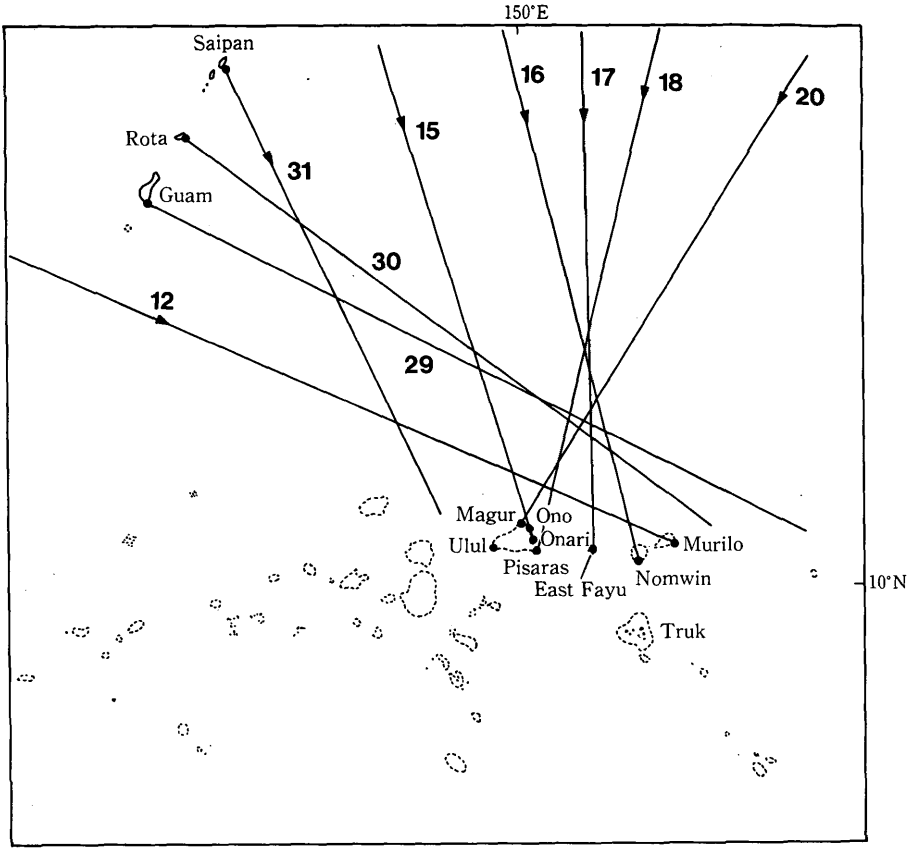


図 7　Fanuwankuwen の位置の推定（Tunui Néén Anufa の知識をもとに作成）
数字は方位番号を示す。

既発表の Pwuupwunapanap という知識項目のなかで，Fanuwankuwen は Guam 島の南東部，Gaferut 島の北東部に位置することになる [秋道　1981b]。こうして Fanuwankuwen の位置を推定したのが図 7 である。

さらに Tipipi と Tipap という 2 つの島は，方位番号で 2，3（Rp の場合），あるいは30，31（Mg の場合）の方位にあることになっている。しかし，他の知識項目のなかで言及されていないため，これらの島じまが実在するとして，その場所や名称を定めることができない。

この知識は，架空の島を中心にして，その周囲に実在の島と架空の存在をあわせもつ内容になっている。したがって，中心に実在物をすえその周囲に実在物と架空の存在を配置する Pwukof や Woofanuw の場合と異なっており，両者の対比は興味があ

る。

（5）Serhakinimasaccha

前項の（3）で Ruwat というサンゴ礁の位置がおおよそ Gray Feather 堆にあるとわかっているが，じっさいの地点を同定することはむつかしい。これらのサンゴ礁を除外して実在する島じまだけをもとにこの知識のしめす航路をえがくと，図8のようになる。このなかには，おおくのサンゴ礁がふくまれていることがわかる。

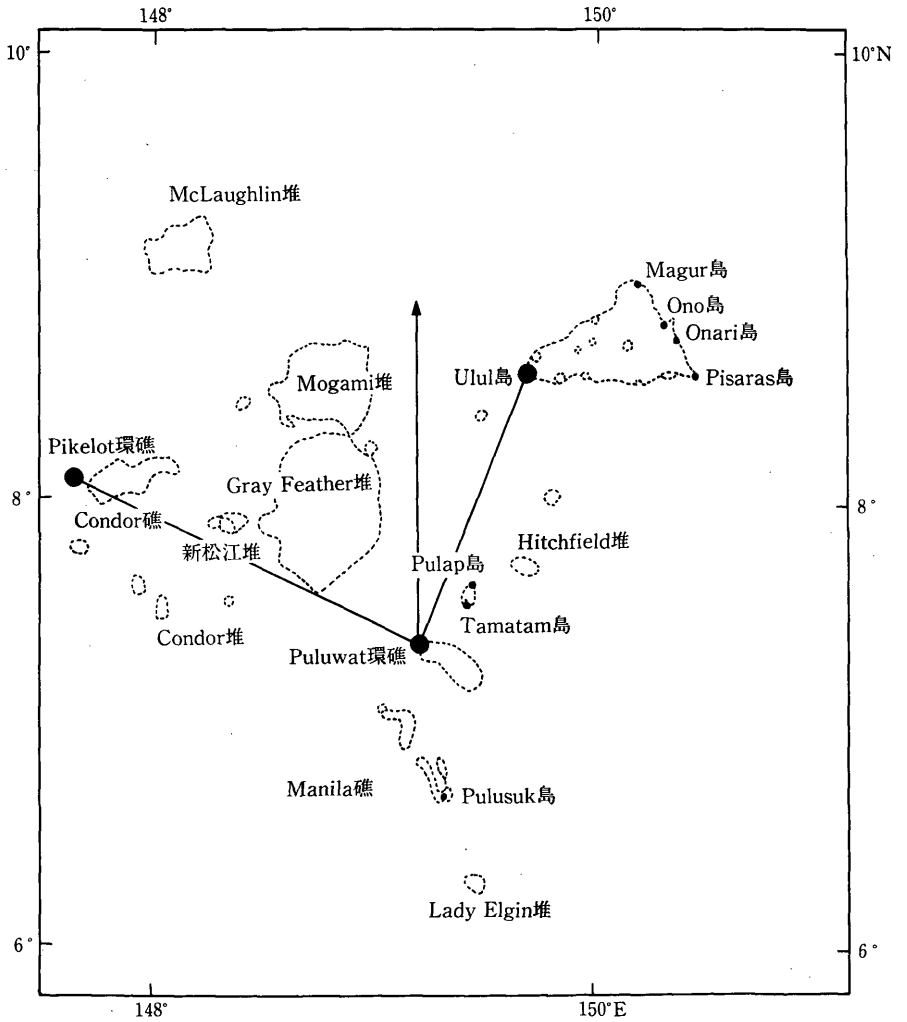


図8　Serhakinimasaccha の地図的展開

図では Puluwat 環礁の真北にはサンゴ礁がないが，この航海で想定されているのは，その左側にある Gray Feather 堆と Mogami 堆である。

（6）Ripweripwen Anan Aniairhé

Puluwat 環礁を出発して Pulusuk 島に到着してから方位番号30にすすみ，さらに Ruwatan apinanei から方位番号 4 にすすむ航路は，前述の Rhéaniy とおなじである。すなわち，この航路が Pulusuk 島から Ulul 島や Magur 島にゆくうえで重要な航路になっていることが示唆される（図 9）。一方，Magur 島からさらに方位番号 4 にすすんで Fanuwankuwen という島に到着するという想定がここでも登場する。

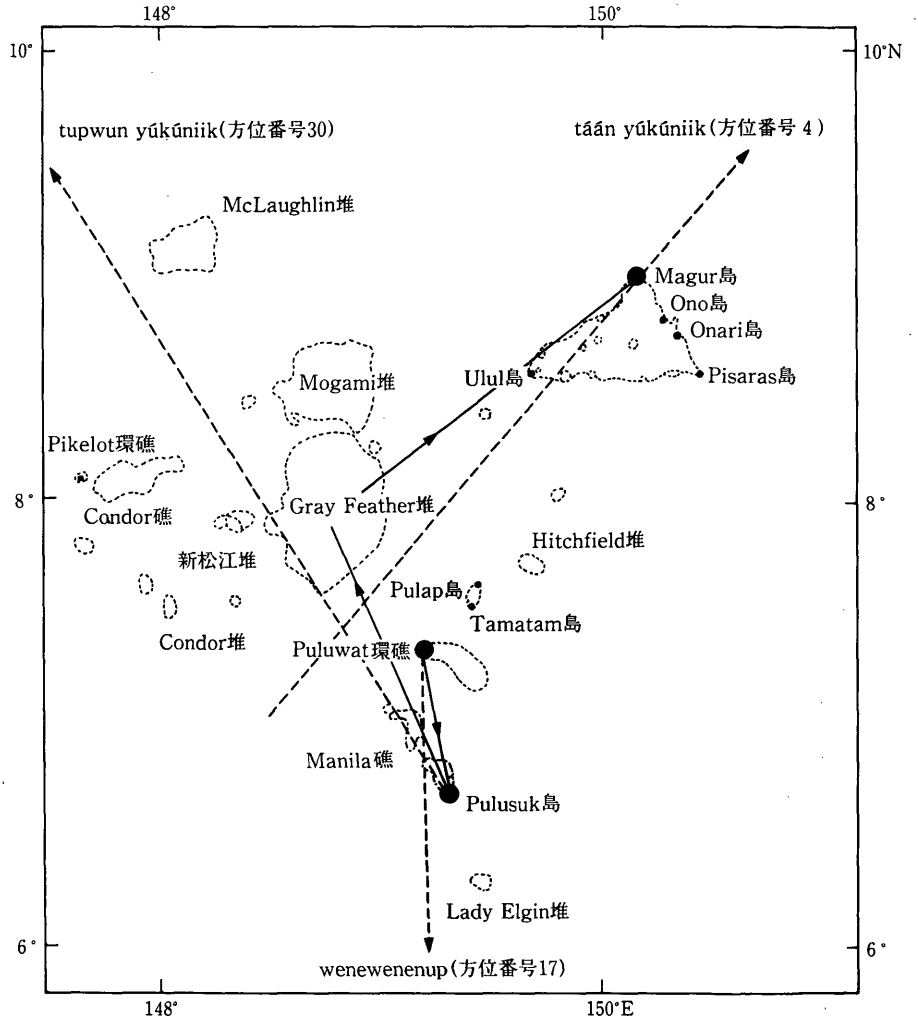


図 9　Ripweripwen Anan Aniairhé の地図的展開
------: コンパス方位
————: 想定航路

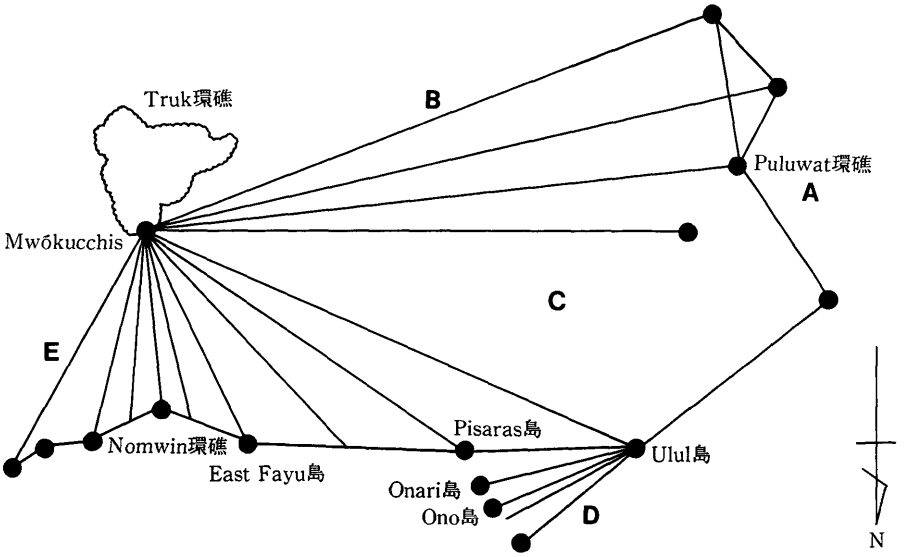


図10　Féfén Perhan Ayufan の地図的展開
図中で，A は口，B は背びれ，C は体，D は腹びれ，E は尾びれにそれぞれ対応する。

（7）Féfén Perhan Ayufan

この知識における長い航路を海図上にあらわしたのが図10である。興味あることに，図からもわかるように，この航路はおおきな魚の形をしている。すなわち，この魚は，口（図10の A），背びれ（図の10の B），体（図10の C），腹びれ（図10の D），尾びれ（図10の E）が明瞭にあらわされている。そして，この知識の名称でもある「尾をくくる」といった表現は，Truk 礁湖の北にある水路が尾のつけ根になっていることからもわかる。

3.　Riesenberg の資料との比較

第Ⅱ章であつかった Satawal 島の資料は，筆者が1980年に同島においてあつめたものである。これらの知識内容のうちいくつかは，すでに Satawal 島より約300キロメートルほど東にある Puluwat 環礁において Riesenberg によって調査され，報告されている [Riesenberg　1976]。

ここでは，Riesenberg の資料とサワタル島における資料とを相互に比較してどのような異同があるのかを検討してみたい。

（1）Senóng

Riesenbergは，Satawal島で採集したのと類似したhélongとよばれる知識を報告している [RIESENBERG 1976: 105–106]。Riesenbergの報告では，クジラや島の数は6である。また，筆者の報告例と比較すると，Elato環礁がLamotrek環礁とOlimarao環礁とのあいだにはいっている点がちがっている。

（2）Yarhuwów

Riesenbergが Puluwat 環礁で aaŕuwóów とよばれる同様な知識を採集している

表1　Yarhuwówの比較（AKIMICHI [n.d.] と Riesenberg [1976] の比較）

島・サンゴ礁	秋道	Riesenberg Y	Riesenberg T
Puluwat	●	●	●
Pulusuk	●	●	●
Tamatam	●	●	●
Pulap	●	●	●
Ulul	●	●	●
Magur	●	●	●
Ono	●	●	●
Onari	●	●	●
Pisaras	●	●	●
East Fayu	●	●	●
Nomwin	●	●	●
Fananu	●	●	
Murilo	●		
Truk	●	●	●
Oroluk	●	●	●
Ponphei	●	●	●
Kosrae	●	●	●
Ngatik	●	●	●
Lukunor		●	
South pass of Satawan		●	
Ta		●	
Satawan		●	
Mor		●	
Kutu		●	
Etal		●	
Pass of Namoluk	●	●	●
Pikelot	●		
Pulusuk		●	
Puluwat	●	●	●

●は言及されていることをしめす。

[RIESENBERG　1976: 94–95]。この場合，Riesenberg は，2人の航海者から情報をえている。筆者の採集したものと登場する島を比較したのが表1である。

これによると Riesenberg の資料で，よりおおくの島を経由して魚が逃げていることがYの例から読みとれる。Tの例は筆者によるものよりも数がすくない。また，Riesenberg の記述では，wurha という魚ではなく meruput という名前のブダイが島から島へ逃げるとされている。

（3）Rhéaniy

Riesenberg の採集した ŕéáliy という知識では，やはり Pulusuk 島からハタを手で捕まえようとしてつぎつぎと移動するという内容自体はおなじである。しかしその移動経路はたいへんちがっている [RIESENBERG　1976: 95–96]。

Puluwat 環礁の航海者Tによると，Pulusuk 島から Nomwin 環礁まで前述の Yarhuwów とおなじようなルートで，しかもおなじ名称をもつサンゴ礁の岩穴を経由して移動する内容になっている。Nomwin 環礁からは，Onari 島，Ruo，Murilo 環礁，Truk 環礁，そして Puluwat 環礁にもどるルートをとる。

一方，Puluwat 環礁の航海者Yは，これとはまったく別のコースをとる。しかもサンゴ礁の岩穴ではなく，島の水路の名前が言及される。魚が移動するルートは，Nema 島を出発して西へむかい，Yap 島を経由して，Heleita と Ailiáf という同定不明の水路や Naihániwa というサンゴ礁に到達する設定になっている。Heleita, Ailiaf, Naihániwa はいずれも，Yap 島からほぼ真西の方位にあるとされている [RIESENBERG 1976: 95–96]。

（4）Tunui Néén Anufa

Riesenberg の採集した túliiy léén anúúfa という知識は，筆者のあつめたものとは内容的にかなり異なっている。Fanuankuwel という島の人が島にある Anúúfa という名前のラグーンで松明をさまざまな方向にかざして，それぞれの方向別にあるものをつかまえて元の島にもどるという想定自体はおなじである。

しかし，この知識そのものが Magur 島で生み出されたものであることから，Puluwat 環礁から Magur 島に到達し，さらにそこから Anúúfa に到達するまでの航海も内容としてふくまれる点がおおきくちがっている。

（5）Serhakinimasaccha

Riesenberg が Puluwat 環礁で採集した同様の知識は，herekilimahácha とよばれるものであり，内容がすこしばかり異なっている。つまり，Puluwat 環礁から真北にならぶサンゴ礁の名前をみると，Ruwat と Wotong のあいだに Lemayéh と Pisiiya とい

う2つのサンゴ礁がある。一方，Satawal 島の事例では，Wotong と Piafé とのあいだに Merhoppwun と Pisaf がはいっているというちがいがある。また，Puluwat 環礁からすすむ航路と立ち寄る島じまもちがう。

Riesenberg の資料では，hémaay という別項の知識として記述されている[RIESENBERG 1976: 98–99]。このなかでえられた情報は内容があまりあきらかではない。しかし，Puluwat 環礁と Truk 環礁間や，East Fayu 島と Pisaras 島間で，航海の軌跡が V 字型の石干見を形づくるような想定になっている。

さらに，Gladwin によると，maayeweán limasechcha という知識のなかで，Gray Feather Bank（堆）と Mogami Bank（堆）にあるいくつかの場所をあげ，そこから Ulul 島と Pikelot 環礁のある方位の名称をのべる知識があるとしている。具体的な論文として公表されていないのでその内容は不明であるが，もしもこのことを考慮するならば，筆者が Satawal 島でえた情報，つまり Semai と Serhakinimasaccha は基本的におなじものである，とする考え方と一致する。ただし，Puluwat 環礁と Truk 環礁間，あるいは East Fayu 島と Pisaras 島間での航海がどのような内容になっているのかは依然として不明である。

（6）Ripweripwen Anan Aniairhé

Riesenberg は，ripwán ánen áliayŕé という知識項目について記述しているがその結果と筆者のあつめたものはおおきく内容が異なっている[RIESENBERG 1976: 106–107]。

Riesenberg の資料では，Pulusuk 島を出発して方位番号30にすすみ，Puluwat 環礁に達する。Puluwat からさらに30番の方位にしたがって航海し，Ruwat 礁に達する。Ruwat 礁から，方位番号4の方向にすすみ，Ulul 島，Magur 島をへて，方位番号14にすすみ Pisaras 島につく。ここから方位番号13にゆき，Truk 環礁に達する。そして方位番号22の方位にしたがって最終的に Pulusuk 島に到達する。Pulusuk 島を出て Pulusuk 島にもどるという内容構成になっている点が Satawal 島の事例とたいへんにちがっていることがわかる。

（7）Féfén Perhan Ayufan

Riesenberg のあつめた資料では，perán ayúfál という名前の知識として記述されている。そのなかで，「魚の尾をしばる」という意味の知識が背景となったわけについて記載されている。

つまり，Puluwat 環礁と Hall 諸島（Namonuito 諸島）のあいだの海は常に波があり，しかもその海域の形が魚に似ているという。この魚の頭は南東を，尾は北西をむいている。このイメージをよりおおきな海域に拡大すると，上顎が Namoluk 環礁，

下顎が Losap 環礁，Oroluk 環礁が背びれ，Truk 環礁が腹，Murilo 環礁が尾の上部端，Pulusuk 島が尾の下部の端に相当するという。

Pulusuk 島と Murilo 環礁のあいだをむすぶ線上に，Puluwat 環礁，Tamatam 島，Pulap 島，Ulul 島，Magur 島，Ono 島，Onari 島，Pisaras 島，East Fayu 島，Nomwin 環礁，Fananu 島，Ruo 島といった島じまを配列することができる。

（8）Féé Yiyas

Riesenberg の調査では，この fééyah [Satawal 語の Féé Yiyas] にかんする資料をおおくあつめて記述している。そのなかには，Pulusuk 島の Féé Yiyas や Kafurhur 島の首長の Féé Yiyas 以外に，南十字座の南中時（つまり真南）の方位におけるもの，方位番号12(カラス座の出現する方位）におけるものなどがふくまれている。このなかで，Pulusuk 島と Kafurhur 島における首長の事例が比較上，興味あるのでとりあげる。

(8-1) Yiyasan fan wenewenenup me wói Sowuk

Pulusuk 島の Féé Yiyas では，方位番号17, 4, 25の 3 つの方位について順番に yiyas をのばして引っ掛かる島や yeparh がのべられている。Satawal 島の資料では方位番号が17，4，25以外に，5 と31のものについてものべられている。

比較できる前者の例のみについてみよう。方位番号17，すなわち真南に出現する自然現象では，最初の 2 つについて名称と内容がともに一致している。しかし，それ以降となると，まったく内容の一致がない。わずか，Taam という名称がカヌーの浮き木ないし無人島をあらわすとされている点が類似している。また Riesenberg の資料で言及されている現象の数は16であり，筆者の収集した 8 例のちょうど 2 倍ある。

つぎに方位番号 4 に yiyas をのばしたさいに出現する現象についてみると，まったく一致点がない。

(8-2) Yiyasan anai Sów Kafurhur

Kafurhur 島の yiyas は，2 例あげられている。いずれも，カロリン諸島にふくまれる島じまの産物を中心に言及している点は Satawal 島の例と類似している。食物としては，植物性のものには，サツマイモ，タロイモ，パンノキ，パパイヤ，ココヤシ，ジャワフトモモ，タピオカ，タバコなどがふくまれる。動物性のものとしてはほとんどが魚であり，そのなかにはアイゴ，カジキマグロ，ウミガメ，アジ，マグロ，ボラ，ツムブリ，トビウオ，ミノカサゴ，タカサゴ，ウツボ，メガネモチノウオ，ベラ，ヒメジ，カツオ，チョウチョウウオ，サメ，シャコガイ，グンカンドリ，カツオドリなどがふくまれる。

Ⅳ. 結論と討論

海から発想する知識

本論で8つの知識項目を検討すると，いくつかのことがあきらかになった。

まず，知識内容の重複については，1. から 8. までの事例を通覧すると，知識のなかで言及される内容は，異なった知識項目，異なった情報提供者であるにもかかわらずおなじ場合がある。しかし，全体からみるとその数はきわめてすくないといわざるをえない。この点でいうと，本論でとりあげた知識がたがいに互換性をもって応用されるほど一般性をもつとは考えにくいことになる。

一方，Satawal 島と Puluwat 環礁における知識内容を比較すると，各項目自体の概略がおなじカロリン諸島における航海術の知識や文化として共有されていることがわかった。しかし細部をみると，島によって知識内容が異なるうえ，おなじ島であっても情報提供者によって大幅に，ときには細部について内容の異同がみられる。とくに確認することが不可能な自然現象については，名称や行動様式，実態，数や形態の特徴においてバラつきがある。

つぎに地図上でサンゴ礁の位置をじっさいにしらべると，いくつかのサンゴ礁は海図上で具体的な名称をもつおおきなバンク（堆）にあたることがわかった。

具体的には，Mogami 堆，Condor 礁，Uranie 堆，Tarang 礁などがそうである。サンゴ礁海域では，海底の地形や漁撈活動との関連でおおくの地名をつけられていることがある。むしろもっと詳細な地名があってもいいとおもわれるくらいである。

ここで，本論でとりあげた知識の意義を吟味しておきたい。Yarhuwów と Rhéaniy の知識はいずれも魚を追いかけるという漁撈活動を主題とした知識である。Tunui Néén Anufa は，ラグーンで夜間，松明を周囲にかざすことを通じて周囲の島を照らしだすという内容の知識であり，これは夜間の干潮時における松明漁を連想させるものであることはあきらかだろう。

Serhakinimasaccha と Féfén Perhan Ayufan では，航路が魚の背びれや魚をとる石干見，あるいは魚自体の形をしているという想定になっている。既発表の Pwuup-wunapanap も，海面上にとてつもなくおおきなモンガラカワハギが浮かんでいるというイメージを利用したものである。

このように本論でとりあげた知識のおおくは，漁撈活動や海の生き物とたいへん密接にかかわった内容から構成されている。これは，航海術の知識としてみた場合，き

わめて当然の発想といえるかもしれない。

ただ，そうした内容のあり方を親しみやすさ（familiarity）ということばであらわす以上に指摘したいことがある。それは，これらの知識が航海がおこなわれる場での位置や方位をしるうえで重要な認識手段となっている点である。このことは，もはやまちがいないと私は考えている。

一方，Pwukof や Woofanuw は，ある島から周囲のあらゆる方位に登場する島やサンゴ礁，あるいはさまざまな現象を網羅した知識であった。これは島にいて想起することのできる知識である。このことをここで強調したい。というのは，Féé Yiyas という知識もまたパンノキの実を採集するというメタファーをもちいて，周囲の島にある食物を採集したり，あるいはさおをのばした先にいろいろな現象が出現するという内容になっており，いわば陸上から発想する海の知識であるといえる。

陸からの航海術の知識がいわば静的であり全方位的であるのにたいして，海における航海術の知識は動的であり，方位もつぎつぎと変化するという特徴がある。いわば，これらは海から発想する知識であるといえる。

架空の存在と空間認知

すでに既発表論文で指摘したように，架空の存在と実在物とが渾然一体となった世界を容認することなしに，カロリン諸島における航海術の知識をとりあげることはできないとおもわれる。

架空とおもわれる存在は，本論でとりあげた項目のなかでもまんべんなく登場した。ただしそのなかで，架空といってもその意味が分化ないし多様化しているようにおもわれる。このことをいくつかの観点から吟味してみよう。

まず，航海術の知識のひろがりとその外延のなかで，架空の存在はどのように理解することができるだろうか。

カロリン諸島の東側のマーシャル諸島や西側のフィリピンは，航海術の知識のなかでは比較的，明確に位置づけられている。しかも，カロリン諸島の外延にかんする情報がカロリン諸島の中央部においてしられている。そうすると，中央部よりさらに東や西にいけばよりくわしい情報がえられるとも予想することができる。

しかしその他方，カロリン諸島の南側にあたるニューギニアや周辺地域の情報が，Kapingamarangi 環礁，Nukuoro 環礁以外，明瞭な形の知識としてはほとんどしられていない。すくなくとも，航海術の知識からみるかぎり，カロリン諸島民にとり，南側は航海領域からはずれる周縁部にあたるとおもわれる。

Senóng の知識がそのことを端的に示唆している。おそらく Senóng の知識に登場するクジラは，具体的な堆や洲である可能性を留保したとしても，さらにその南にはなにもわかっていないことを知識として了解させる装置とは考えられないだろうか。すると，クジラは南の果てに立ちはだかる境界標示になっているとみなすことができる。

一方，北のほうをみてみよう。本論でとりあげた知識にあったように，Fanuwankuwen，Kafurhur，Tipipi，Tipap といった島じまがカロリン諸島の北側海域に存在するとされていた。そして，実在するマリアナ諸島以外には，言及される知識の量もたいへんにすくない。しかし，Fanuwankuwen と Kafurhur だけは例外で，おおくの知識のなかで執拗なまでに登場するし，Tunui Néén Anufa のように Fanuwankuwen を中心的にあつかった知識も存在する。

この場合も，Fanuwankuwen，Kafurhur，Tipipi，Tipap などが北の境界にある島として登場する。それらの島じまを越えた領域にかんする知識はもはや存在しない。

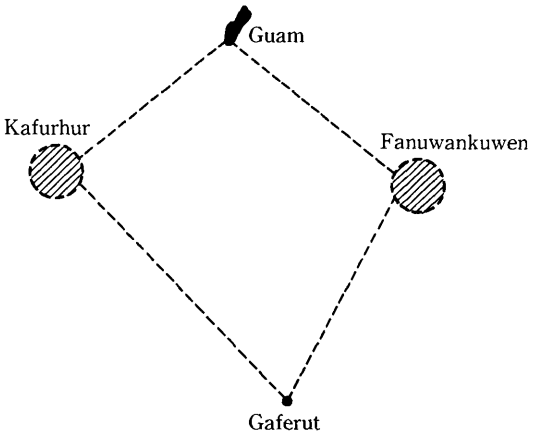
このようにしてみると，東西方向には具体的な島じまの存在が人びとによって認識されている一方，南北方向については，架空の存在が既知の領域と未知の領域の境界を標示するものとして存在することになる。

ところが，境界を標示するための認識の手段として以外に，架空の存在が利用されていることがある。境界＝架空という議論だけでは片づかないのである。例をあげよう。すでに発表した Pwuupwunapanap という知識にかんする論文で，実在と架空の問題をとりあげた。Pwuupwunapanap という知識は，Pwuupw すなわちモンガラカワハギと形態的に類似したダイアモンド形をした空間領域（これも Pwuupw とよばれる）の4つの頂点に，それぞれ特定の島が対応するという内容のものである。

各頂点にあたる島は，かならずしも実在するものではない。実在する島じまからなる Pwuupw をじっさいに海図上で作図すると，ダイアモンド形から変形した形にしかならない。

本論との関連で指摘したいのは，架空の島とおもわれる Fanuwankuwen や Kafurhur をふくむ Pwuupw の意味である。図にしめしたように，Gaferut 島と Guam 島にくわえて，Fanuwankuwen と Kafurhur を他の2頂点とするダイヤモンド形をえがこうとすると，どうしても適当な場所に Fanuwankuwen と Kafurhur をきめなければならない。任意にえらぶと，Pwuupw の形はいかようにもかわる（図11）。

だが，じっさいの航海においては，いかようにもかわる海図を想定する必要はまったくない。頭のなかではきわめて整合的な形をした Pwuupw を想起すればよいので



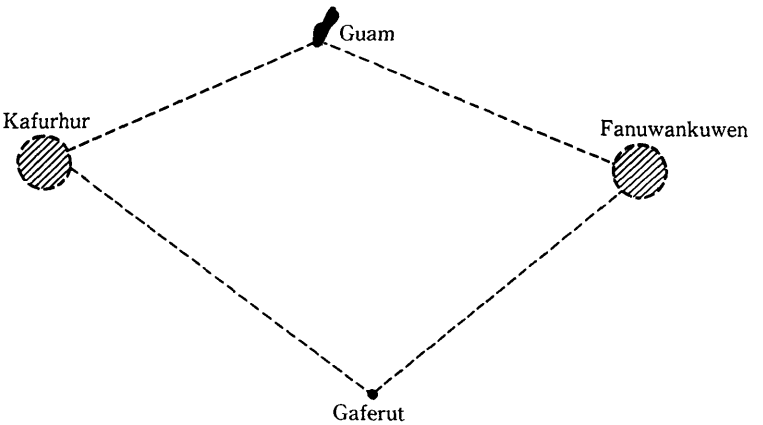


図11　Pwuupwunapanap における架空の島の位置と空間認識
Guam と Gaferut は実在の島
Kafurhur と Fanuwankuwen は架空の島

ある。この点で，Pwuupw の知識は架空の存在をつかって位置や空間を定位するという重大な意味をになっているのである。

さらに，島やサンゴ礁ではなく，鳥や魚，あるいはクジラといった自然物でありながら，架空とおもわれる存在のもつ意味についてふれておこう。すでに Pwukof にかんする論文で指摘したように，登場する架空の動物は，1）偶然に遭遇する不確かな存在であること，2）たとえばなんらかの理由で消失あるいは死んでも，別のものに

置換するという再生産，あるいは再生する，という2つの理論を踏まえてとらえられている [秋道　1988]。

Pwukof という知識は，海上というとりとめもなく，区分することがむつかしい領域で，しかも移動性のある動物の存在を人間がいかにして認知し，利用してきたかをしめす興味ある知識といえる。しかも，Pwukof では，実在するとはおよそ考えにくい形態や色，あるいは行動様式をもつ動物が言及されている。

もしこれらを一種の誇張，自然状態からの逸脱とみなしたとしても，じっさいに遭遇する可能性の高い自然物といったい峻別できるのであろうか。この点は，依然として不明であろう。架空のものにしろ，実在のものにしろ，それを区分できない世界の認識手段として，生物が登場するところにこの知識の意味があるとおもわれる。Pwukof はある島からみて，ある一定の方向に出現する生物現象をとりあげたものである。これにたいして，本論でとりあげたいくつもの知識は，移動するなかで登場するさまざまな現象をのべるという特徴があった。両者の共通点は，出現する方位がわかっていても，場所自体，あるいは島からの距離がいっさい不明という点である。

じっさいに船で航海するとわかるように，時間をおって，何種類の生物に出くわす。イルカの群れ，アジサシの飛来，流木やヤシの実などの浮遊物。出現する時間も不確定である。ほとんど30分おきごとにつぎつぎと鳥や魚があらわれることもあるし，まる1日，まったくなにも出くわさないこともあるからだ。このような過程を考えると，航海術の知識のなかでつぎつぎといろいろな生物や現象が言及されるのはけっして奇異なことではないとおもわれる。

むしろ，航海という海上移動の過程が，時間をおって登場するさまざまな生物によって恣意的に区分されているとみなすことができないだろうか。つまり，けっして時間や空間の概念たりうるというわけではないが，時間的・空間的な変化を示唆する手だてとして生物が出現すると解釈するわけである。

航海者にとり，海上で遭遇するあらゆる現象は世界をしる手だてになっているのであり，なにもない，なにも出現しない世界などありえないのである。実在と架空はけっして峻別されるのではなく，連続的に変化し，しかもそれが渾然一体となっているのである。一見，奇妙な架空の存在を知識として理解することは，航海という世界そのもののあいまいさ，不確かさを確認することにもなるのである。

以上の点から，航海術の知識を単に実用と遊び，実在と架空といった知識の二元的な解釈だけでとらえるべきではけっしてないことはあきらかだろう。これまでみたように，航海術における架空の存在は，既知の領域と未知の領域とのあいだに横たわる

境界を標示する装置として，面としての空間イメージをつくるうえで，さらには時間的・空間的な推移や変化をしる目安としてあるのではないか。

結局，全体としてみると，架空の存在は，現実と異界の同居，空間と時間の不確定性をむしろ肯定するものであるといえる。海という不確かな世界であればこそ，人びとは架空の存在を必要としたのである。

謝　　辞

本研究のもとになった野外調査は，昭和54年度文部省科学研究費補助金（現地調査）「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的調査」（代表者：石森秀三）の交付をうけておこなったものである。共同研究者の石森秀三氏（国立民族学博物館），須藤健一氏（神戸大学）には調査を通じて，多大な協力と励ましをいただいた。本研究は，国立民族学博物館共同研究「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的研究」（昭和55年度，代表石森秀三）において，口頭発表（昭和56年2月25日）したものである。発表のさい，班員である茂在寅男氏（元東京商船大学），松木哲氏（元神戸商船大学），杉藤重信氏（椙山大学）より貴重なご助言をいただいた。

さらに，本報告の一部は，国際シンポジウム「自然と文化をこえて」（MOA 主催平成3年3月）において，英語で報告をおこなった。同シンポジウムにおいて，Charles O. Frake, Harold C. Conklin, Peter Dweyer 各教授をはじめ参加者の方がたより数々の貴重なコメントをいただいた。感謝の意をあらわしたい。最後に，航海術の知識を御教示いただいた Satawal 島の Reppanganap 氏，Ewiyong 氏，Yikirep 氏，Magur 氏，Epemai 氏，さらに調査助手をつとめていただいた S. Sauchomal 氏に厚く感謝の意を表する次第である。

文　　献

秋道智彌

1980 「“嵐の星”と自然認識——サタワル島における民族気象学的研究」『季刊人類学』11(4): 1–51。

1981a 「Satawal 島における伝統的航海術——その基本的知識の記述と分析」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 617–641。

1981b 「魚・イメージ・空間——サタワル島民の航海術における位置認識のしかたについて」『季刊人類学』12(2): 3–46。

1981c 「“悪い魚”と“良い魚”——Satawal 島における民族魚類学」『国立民族学博物館研究報告』6(1): 66–133。

1984 「サタワル島における伝統的航海術の研究——島嶼間の方位関係と海域名称」『国立民族学博物館研究報告』9(4): 651–709。

1985 「サタワル島における伝統的航海術の研究——洋上における位置確認方法とエタック（*yeták*）について」『国立民族学博物館研究報告』10(4): 931–957。

1988 「航海術と海の生物——サタワル島における航海術の研究」『国立民族学博物館研究報告』13(1): 127–173。

Akimichi, Tomoya

1987 Triggerfish and the Southern Cross: Cultural Associations of Fish with Stars in Microne-

sian Navigational Knowledge. *Man and Culture in Oceania* 3 (Special Issue): 279–298.

n.d. Image and Reality at Seas: Fish and Cognitive Mapping in the Carolinian Navigational Knowledge. In Katsuyoshi Fukui and Roy F. Ellen (eds.), *Rethinking Nature and Culture: Ecology, Cognition and Domestication.* (in press)

AKIMICHI, Tomoya and Sabino SAUCHOMAL

1982 Satawalease Fish Names. *Micronesica* 18: 1–34.

ALKIRE, William H.

1970 Systems of Measurement on Woleai Atoll. *Anthropos* 65: 1–73.

1978 *Coral Islanders.* Arlington Heights.

BLADES, M. and C. SPENCER

1986 Maps and Wayfindings. *Man* (N. S.) 21(2): 343–344.

FRAKE, Charles O.

1985 Cognitive Maps of Time and Tide Among Medieval Seafarers. *Man* (N.S.) 20(2): 254–270.

GELL, A.

1985 How to Read a Map: Remarks on the Practical Logic of Navigation. *Man* (N.S.) 20(2): 271–286.

GLADWIN, Thomas

1970 *East is a Big Bird——Navigation and Logic on Puluwat Atoll.* Harvard University Press.

LESSA, William A.

1966 *Ulithi: A Micronesian Design for Living.* New York.

RIESENBERG, Samuel H.

1976 The Organization of Navigational Knowledge on Puluwat. In Ben R. Finney (compiled) *Pacific Navigation and Voyaging* (Polynesian Society Memoir 39), The Polynesian Society Inc., pp. 91–128.